

III 小学校英語教育の期待と疑問

小学生へ英語を教え始める最適期はいつ頃か、ということについては幾つかの説がある。「早ければ早いほどよい」という漠然とした意見を述べる人もいるが、幼児の言語習得の過程を追跡し、早い時期に教え始めたほうが発音面ではプラスになる場合が多いということは通説になっている。言語習得に関しては、ペンフィールドとロバーツ（1959）は、言語習得についての最適年齢は、9歳から12歳の時期、すなわち小学校3年から6年の間の時期だと述べている。また、神経言語学の立場からの言語習得に関する右脳の働きについても種々の説が流布している状況が、まだ、定説はないと言ってよいであろう。

しかし、経験的には早期の言語習得は、良きにつけ悪きにつけその影響が残るのは事実のようであり、ここに初等教育において英語をカリキュラムの中に導入する計画を実現しようという一連の動きの根拠がある。

では、研究会開発校で、一年生から英語を教える立場に立った先生方はどのように考えているのだろうか。このような点に関しては、下記のような質問を行った。

Q3 国際理解に通じる小学校の英語教育についてお聞きします。小学校の英語教育は3年生から開始することができます。そして開始時期が早い方が有効だという説が有力です。しかし（ロ）にあるような反対論もあります。（ロ）を踏まえた上で、以下の質問にお答えください。

（イ）国際理解教育に通じる小学校英語教育の開始時期について、いつから始めればよいか皆様の意見をお聞かせください。

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
① 3年生から	242	48.0%	66	28.1%	1,060	35.8%		
② 4年生から	11	2.2%	10	4.3%	247	8.3%		
③ 5年生から	13	2.6%	9	3.8%	313	10.6%		
④ 6年生から	1	0.2%	1	0.4%	38	1.3%		
⑤ 何年から始めてもよい	230	45.6%	114	48.5%	1,033	34.9%		
⑥ 中学からでよい	7	1.4%	35	14.9%	271	9.1%		

【考察】

Aグループの約半数の先生方が3年生からの英語教育に賛成している。早期英語学習が英語のみにとって効果的であるだけでなく、ほかの教科に、また、生活面に英語教育がプラスの波及効果を及ぼしていると考えているからであろう。勿論、この先生方は小学校1年からの英語学習にも賛成していると考えられる。

ただ、A、Bグループの約半数の先生方が「何年から始めてもよい」としているが、これはBグループで④や⑥を選んだ先生方は小学校段階で「落ちこぼれ」がでてくる現実を懸念しているものと思われる。

(ロ) 小学校英語教育に対する慎重論・反対論があります。以下の項目に対し、そう思う場合には○をお書きください。(複数回答可)

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
① 小学校で十分日本語の習得ができた後、導入するほうが良い。	59	9.9%	54	19.0%	768	22.9%		
② 学習開始年齢よりも重要なのは学習時間であり、中学の入門期の時間数を増やすほうがよい。	14	2.4%	19	6.7%	218	6.5%		
③ 中学英語教育と一貫性に欠ける恐れある。	83	14.0%	58	20.4%	474	14.2%		
④ 小学生だと英語教育と国際理解教育との関係が強化できない。	23	3.9%	20	7.0%	219	6.5%		
⑤ 「リーディング・ライティング」よりも「リスニング・スピーキング」がさらに重視され、中学以降の英語教育を歪めてしまうのでよくない。	11	1.9%	11	3.9%	105	3.1%		
⑥ 現場の教員に過重な負担を与えてしまうのでよくない。	113	19.0%	91	32.0%	574	17.1%		
⑦ 受験戦争の低年齢化につながるのでよくない。	36	6.1%	47	16.5%	520	15.5%		
⑧ ALT や JTE、クラスサイズなどに問題がある。	139	23.4%	46	16.2%	678	20.3%		
⑨ その他	87	14.6%	33	11.6%	776	23.2%		

【考察】

A, B グループの回答が 20% を超える項目が少ないことは、先生方の英語教育に対する自信を物語るものであろう。

特に A グループで、①の早期英語教育に対する消極論に賛同する先生方が少ないことは、研究開発校であるという特殊事情があるにせよ、適切な授業によって小学校英語教育は有意義なものになることを示していると言えるだろう。

⑥の現場の教員に過重な負担を与えてしまうのはよくないとする先生方が約 20% いることは当然予想されたことである。教育行政の慎重な対応が期待される。

(ハ) 小学校英語教育を担う現場の先生方の研修についてお聞きします。現場の先生の場合、どのような研修し、指導力を養成したら、以下の項目でふさわしいものに○、考えられない、または不可能と思われるものには×をつけてください。(複数回答可)

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
① 30 日間くらい、専門家から小学校英語教育に必要なことの指導を受ける。	182	30.6%	62	21.8%	1,166	34.8%		
② 中学校の英語の授業をできる限り見学に行き、英語担当者から指導に関する留意事項を聞く。	49	8.2%	35	12.3%	586	17.5%		
③ 中学の英語担当者に活動を視察してもらい、留意事項を聞く。	76	12.8%	33	11.6%	534	16.0%		
④ 英語の副免許を持つ小学校の先生から暇を見て研修を受ける。	134	22.6%	50	17.6%	575	17.2%		
⑤ ラジオ・テレビの基礎英語講座などを特定し、聞くことを義務とし、日を定めて全員で協力して研修を行なう。	98	16.5%	19	6.7%	637	19.0%		
⑥ 全ての研修は個人の自由に任せる。	142	23.9%	92	32.4%	508	15.2%		
⑦ ALT や EAA とよく話し合って自己研修案を作成し、それにしたがって研修する。	326	54.9%	100	35.2%	1,643	49.1%		
⑧ 民間の英語学校などに通って研修する。	66	11.1%	31	10.9%	575	17.2%		
⑨ その他	64	10.8%	17	6.0%	536	16.0%		

【考察】

A グループでは、⑦に 5 割以上の先生が賛意を表したが、慣れ親しんだ ALT や EAA の助手になって研修したほうがよいということであろう。①に賛同した先生方からは、英語教育に真

正面から取り組もうとする意欲が強く感じられる。全体的には、多忙な校務をこなさなければならぬ時期に日頃あまり交流のない人たちから指導を受けることには消極的であることがわかる。

また、Cグループが①～⑧において、AグループかBグループとほぼ同じ割合の回答をしていることは注目に価する。

(二) 大学の小学校教員養成課程にいる学生は、近い将来英語を教えることにはなりますが、現在ほとんどの大学では小学校英語教育に関する専門的な授業は行われておりません。そこで彼らが大学でどのようなことを学習すればよいか、以下の項目からお選びください。(複数回答可。尚、単位合計が最大6単位までとお考えください。)

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
① 日常の英会話の授業を90分/週、1年間学ぶ。(2単位)	154	25.9%	75	26.4%	872	26.1%		
② 日常の英会話の授業を90分/週、2年間学ぶ。(4単位)	244	41.1%	94	33.1%	1,273	38.0%		
③ 言語習得理論を90分/週、半年間学ぶ。(2単位)	33	5.6%	7	2.5%	442	13.2%		
④ 異文化理解のために、ネイティブスピーカーを交えて比較文化の授業を90分/週、半年間学ぶ。(2単位)	302	50.8%	120	42.3%	1,765	52.7%		
⑤ 発音・イントネーションを含めた音声学講義か演習を90分/週、半年間学ぶ。(1単位)	155	26.1%	57	20.1%	1,235	36.9%		
⑥ 小学校英語教育演習を90分/週、半年間学ぶ。(1単位)	231	38.9%	68	23.9%	1,284	38.4%		
⑦ TOEIC、TOEFL、英検などのリスニングの授業を90分/週、半年間学ぶ。(1単位)	36	6.1%	15	5.3%	437	13.1%		
⑧ 大学で自由に勉強し、英検準1級か2級は取得しておくこと。	45	7.6%	29	10.2%	458	13.7%		
⑨ その他	42	7.1%	11	3.9%	375	11.2%		

【考察】

④、②を1位、2位に選んだA、Bグループは共に「理論より実践」を重視していると言えよう。勿論、理論面を軽視しているわけではないが、教室で指導してみると、実践訓練の不足を感じざるを得ないのではないだろうか。

④の異文化理解に関しては、A、B、C全てのグループが学習の必要性を感じている。いざ教えるという段階になると、異文化に関する知識・理解がいかに貧弱であるかがわかるということだろうか。

また、同時に自国文化に関する学習の深化も自覚するに違いない。

(ホ) 小学校で行われる英語教育のレベルについて、どの程度のことをお望みですか。(複数回答可)

選択肢	グループ・人数・%		A		B		C	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
① 簡単な挨拶が言え、歌が歌える。	363	61.1%	177	62.3%	1,915	57.2%		
② ①に加えて買い物・道案内・学校案内・食事などの日常生活によく出てくる英会話ができる。	292	49.2%	105	37.0%	1,218	36.4%		
③ 日本人と、特に英・米両国人の主なジェスチャーの意味の違いがわかる。	62	10.4%	24	8.5%	367	11.0%		
④ 簡単な英語を正確に発音できる。	84	14.1%	35	12.3%	842	25.2%		
⑤ アルファベットは正確に読めて、書けるようになる。	33	5.6%	18	6.3%	652	19.5%		
⑥ リズム、イントネーションに注意できる。	109	18.4%	22	7.7%	734	21.5%		
⑦ 簡単な単語が書ける。	15	2.5%	7	2.5%	335	10.0%		
⑧ ネイティブスピーカーと、ジェスチャーを交えながらやさしい英語で、お互いに意志の伝達ができる。	381	64.1%	101	35.6%	1,936	48.9%		
⑨ 簡単な童話・物語を聞いてわかる。	53	8.9%	22	7.7%	327	11.2%		
⑩ 数、曜日、時間、季節、天気、食事・食べ物、スポーツなどに関する基本的な英語を覚える。	204	34.3%	70	24.6%	950	28.4%		
⑪ 外国人に対して自分から積極的に話しかける。	370	62.3%	122	43.0%	1,270	37.9%		
⑨ その他	20	3.4%	8	2.8%	309	9.2%		

【考察】

A、B、Cグループはいずれも①、②、⑧、⑪を英語教育の当面の到達目標としようとしていることがわかる。このことからA、Bグループについては、先生方の実際の授業の様子が推測できる気がするが、このレベルの目標が達成できれば小学生にとっては十分と言えるだろう。

ただし、⑪に関しては、AグループとCグループの差が大きいことが気になるが、これは研究開発校の先生方が生徒とALTとの接触・交流を観察した結果、生徒の積極的なALTへの話しかけに物足りなさを感じたからではないだろうか。

なお、この項目では第3位まで網かけをしてみた。

IV 中学校英語教師の英語教育に対する期待と疑問

2002年より、「総合的学習の時間」の中で、「国際理解教育の一環としての外国語会話等が行われるときには、各学校の実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習活動を行う」ことが、教育課程審議会の答申により可能になった。そして、2000年から前倒しの形で実施する予定の小学校もでてきている。そして近い将来、小学校で英語活動経験した生徒を中学校が受け入れることになるだろう。

ここでは、全国の、文部省指定の研究開発校出身の生徒を受け入れている中学校の英語教員を対象に行ったアンケートをもとに、研究開発校出身者である生徒の特徴や、小学校での英語教育に関わる指導形態、今後の取り組み、さらに小学校と中学校の連携について考えてみた。

1. アンケート調査の内容

全国の文部省指定の研究開発校出身の生徒を受け入れている61校の中学校にアンケートを依頼したところ、29校の64名の英語教員から回答をいただいた。

最近の研究開発校の出身者を教えている教員と、かつての卒業生を教えた教員など、状況は様々であるが、それぞれの経験をもとに回答していただいた。

アンケートには、①英語能力・態度において、研究開発校出身者にあてはまる特徴、②先生方の普段の授業活動・内容、③小学校への英語導入についての賛否とその理由、④ALT（外国語指導助手）とJTE（日本人英語教師）の関わり、指導形態、⑤小学校での教科書教材の扱い、⑥小学校英語教育へ望むこと、⑦小学校と中学校の連携、そして⑧国際理解に通じる英語教育に対する考え、の項目を設けた。回答は、選択式のもの、コメント欄での自由記載の形をとった。

ここでは、特に、①研究開発校出身者にあてはまる特徴、③小学校への英語導入についての賛否とその理由、④ALT（外国語指導助手）とJTE（日本人英語教師）の関わり、指導形態、⑥小学校英語教育へ望むこと、そして⑦小学校と中学校の連携を取り上げて小学校での英語教育について考察する。

2. 研究開発校出身者の特徴

最初に、選択の形式で、英語の4技能（聞く、話す、読む、書く）と学習意欲・態度・関心面について、細かい項目に分けて研究開発校出身者と他の小学校の卒業生と比べてもらった。そして、その後で、研究開発校出身者に見られる特徴的なことを記述してもらった。ここでは、後半の記述の部分から主なものを取り上げる。

特徴的なものは、次のようなものである。

- ①外国人に対して偏見や抵抗なく自然に接することが出来る
- ②他の小学校の卒業生との学力の差はあまり見られないが、英語やALTに慣れていて授業に意欲的である
- ③話すことにおいては、積極的であり、興味関心が高いが、書くことに対して抵抗感を持っているようなところがある
- ④大きな差ではないが、文字と音のつながりがなんとなくわかっている生徒が多い

この他にも、先生方の気づいた点として、聞く・話すといった動きのある活動を活発に行ってきたので、読んだり書いたりする中学の学習活動に、小学校と中学校とのギャップを感じ、克服出来ない

生徒もいるというものがあつた。

【考察】

全体的には、小学校の時点で、コミュニケーションを図ろうとする意欲や積極性を育てという点では、外国人に自然に接したり、英語に慣れ親しんでいるという良い面が出ており、研究開発校の成果であると考えることが出来る。問題点としては、やはり小学校と中学校の連携にあると思われる。このことについては、6の「小学校と中学校との連携」の項で考察する。

3. 小学校への英語導入

小学校への英語導入については、これまでいろいろな人々を対象に行われたアンケートがあるが、今回は、中学校の英語教育に携わり、さらに研究開発校で実際に英語に触れてきた生徒と接している教員の意見を尋ねた。結果は、次の通りである。

賛成	： 38	
反対	： 8	
どちらかといえば賛成	： 10	
どちらかといえば反対	： 3	
どちらともいえない	： 3	合計 62名

約8割の教員が賛成の立場を取っているが、その一方で強い反対もある。賛成の立場には、条件付きが多く、現状のままでは素直に受け入れられないという様子が伺える。

賛成・反対の理由として、次のような選択肢を上げ、当てはまるものをすべて選択し、また必要に応じて、その他の理由を書いてもらった。

賛成理由：

- ①小さい時から国際感覚を養うことが出来るから・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
- ②英語や外国人との交流を通して積極的な態度を身につけられるから・・・・・・・・・・ 30
- ⑧音声の習得が早いという利点があるから・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

反対理由：

- ④国語である日本語の習得を徹底的に行ってからの方がよいから・・・・・・・・・・ 4
- ⑤小学校で英語を教える十分な準備ができるのかということと、
また大きな負担になるのではないかと考えるから・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- ⑥小学校の段階で英語嫌いができるのではという不安を感じるから・・・・・・・・ 4

条件付きでの賛成があるということには前に触れたが、その代表的なものが次のものである。

- ①教師側の準備が整っているのであればよい
 - ②小学校と中学校の関連性を考えて、系統だてたものがあればよい
 - ③教育課程がそれにあわせて変わるのであればよい
- また、反対の理由の中には
- ①小学校段階で能力差が確立してしまう
 - ②子どもにとっても教師にとっても負担になるのではないか
 - ③学校間格差が大きくなるのではないか
 - ④高校入試が変わらない限りは何をやっても難しい

というような現実的な問題も上っている。

【考察】

小学校に英語が導入されるということに、中学の教員がいろいろと考えるのは、小学校では国際理解教育の一環としての英語と、教科としての英語との違いが曖昧に扱われているからであると思われる。研究開発校によって、教科として設定して取りくんだ学校と、国際理解を前面に出して取りくんだ学校があり、はっきりとした形が見えてこないというのも一つの理由である。小学校側からすると、それぞれの学校の実態に応じての設定なので、それが総合学習のやり方なのであるが、中学校側からは、なかなか理解できないものがあるようだ。基本的には、小学校に英語学習・活動が導入されることには賛成であるが、現段階でのスタートには不安を感じている。勢いだけで始めてしまうと、最初はうまくいっても、継続していけるだけの確かな方法や目標がなければ得るものが少ないのではないかと考えられる。

また、現実問題として各学校にALTが配置される可能性が極めて少ないことを考えると、中学のJTE（日本人英語教師）が小学校に専任として入り、それぞれの学年のHRT（学級担任）と長期的計画を練り、そして学校で話し合いを持ち、教員の共通理解を図った上でカリキュラム構成をしていく機会を持っていくべきである。これは、少なくとも最初の2年は継続されるべきであると考えている。このためには、地域の教育委員会がまず最初に動かなければならない。さらに、県レベルでの小学校の先生への研修も必要になってくる。実際に、研究開発校の先生方はお互いの実践を観察することもさることながら、様々な研修に赴き、指導方法や指導内容の研究を継続していたようである。

JASTEC（日本児童英語教育学会）は20年以上も前から、児童の英語教育の活動を広げてきた。最初は、私立学校における、教科としての英語教育や個人主催の児童英語教育の印象があったが、公立小学校の英語に関心が向けられ出した当初から、公私の枠を越えて公立小学校の英語教育に関わり、効果的な活動の模索を行っている。ここに、多くの研究開発校の先生方が加わり、さらに幅の広いものとなっているようである。学会の活動は小学校での指導者の間では、もちろん話題になるのだが、やはり一番重要なことは、何を教えるのか、どのようにして教えるのか、ということであるようだ。指導内容や方法についてのワークショップの充実が肝要であろう。

4. 指導形態—ALT（英語指導助手）とJTE（日本人英語教師）の関係

研究開発校の中には、中学校の英語教師がALTの代わりに専任教師として入るケースや、ALTの助手役として働くケースが見られたが、これに関しての考えを書いていた。

指導形態に対しての意見をまとめてみると、次のようになる。

- ①ALTかネイティブスピーカーが教えるべき・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
- ②ALTがメインとなりJTEが助手の形態・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
- ③JTE（中学校の英語教師）・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
- ④JTEとHRT（小学校の担任）・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
- ⑤ALTとHRT・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

【考察】

中学校の現実を考えると、小学校へ英語教師が外向いて指導することが不可能だとして、始めから受け入れない意見があったが、専任として立場がしっかり確立されるのであれば、小中学校間の連携にもなるので賛成であるという意見も少なかった。

音声面での指導という点では、ALTやネイティブの生きた発音に触れることに大きな意味がある

という意見が多くあり、またクラスを把握しまとめるという点では、HRTの関わりが重要であるという考え方も見られた。

理想は、ALTに指導に入ってもらうことではあるが、それ以外の形態でも、工夫と努力次第でうまくいく可能性もある。またALTは、ただ単に英語の母国語話者というだけではなく、教職の経験やTESOL等の資格を取得している人であれば、クラスのマネジメントもうまく、児童の年齢に関係なく適切な活動を行うことが出来るだろう。

5. 小学校英語教育への希望

実際に、小学校において何らかの形で英語学習が始まった場合、中学校も小学校実情を受け止め、柔軟に対処していかなければならない。中学校でのこれまでの授業を大きく変える必要はないにしても、小学校での生徒の経験を少しでも生かせる有効な方法等を考える必要が出てくるであろう。

そこで、小学校の英語教育に望むことを、記述式で自由に書いてもらった。その中でも多かったものを以下にまとめてみる。

- ①小学校と中学校における、指導内容や方法等の相互理解が必要である
- ②簡単な日常会話や便利な表現を習得する
- ③まずはローマ字・アルファベットをしっかり覚える
- ④コミュニケーション活動を通して、楽しく興味深い授業を展開する
- ⑤話そうとする意欲を高められるような指導や活動をする
- ⑥フォニックスや音声指導をする
- ⑦英語嫌いを作らない

【考察】

ローマ字が出来ていないという現状が指摘され、英語の導入の時点でかなり苦勞するという意見も少なくない。また、実際に小学校で英語に触れてきた生徒が、音声面でリーダーとなってクラスに良い影響を与えていたり、活動や会話に積極性を見せているので、これらの利点を大切にする意味で、コミュニケーションへの意欲や楽しさを中心においた活動や音声指導を多く取り入れた活動するのが望ましいという意見もあった。

6. 小学校と中学校の連携

前項のアンケートの中で、小学校に望むこととして、小学校と中学校間での指導内容や方法等の相互理解の必要性があげられていたが、この小学校と中学校との連携は、これまで以上に話題になり、避けられない重要な事項であると思われる。そこで、この連携を、どのように具体化していったらよいか、答えてもらった。

その結果は、次の通りである。

- ①相互理解のための状況・情報の交換をする機会を多く持つ
- ②授業参観の機会を設定する
- ③小中一貫のカリキュラムを検討する
- ④研修会を持つ
- ⑤連携は根本的に無理ではあるが、双方とも連携にむけて努力する必要がある

【考察】

これまで、小学校、中学校間の交流や連携の必要性を感じていたものの、なかなか実践出来なかったため、これを機会に、お互いの情報を密に交換することが良いという意見が多く見られたのが特徴的である。また、情報交換と共に、相互の授業参観や研修会等の機会設定の必要性も痛感するようである。お互いの忙しさを考え、最低限、小学校で扱ったものについての申し送り等があるとよいという意見も出されているが、申し送りの恒常化が必要であろう。

一方で、中学校と高校の連携さえ難しい現実を考え、小中の連携が不可能であるという考え方もある。

小学校と中学校との交流は、義務教育や隣接した地域性などの観点から、中学校と高校の交流よりも親密であるように見えるが、年に数回の合同研修会があるにすぎないようである。もちろん、各地域独自の事情によって多少の差はあると思われるが、小学6年生の担任と中学の新1年生の担任とのつながりが主で、お互いによく知らないことが多い。

今回、国際理解教育の一環として、英語学習・英語活動を小学校に取り入れることをきっかけに、中学の英語教師が小学校に入るようになると、永続的で有意義な連携がスタートできるのではないかと思われる。

7. 総括

今回は、全国の研究開発校出身者を受け入れている中学校の英語教員に、実際に小学校で英語に触れてきた生徒についてのアンケートを実施することで、実態を知ることが出来たと同時に、様々な観点において、小学校における英語教育に対する意見を聞くことが出来た。

研究開発校を卒業した生徒たちは、小学校と中学校との学習活動の違いに、戸惑いを感じる生徒もみられはしたものが、全体的には、話すことと聞くことを中心とした活動を通じて、英語に親しみ、かつ外国人と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が身についたという成果がみられる。

小学校で英語教育に望むこととして、色々なことが挙げられているが、その第一は、小学校と中学校の連携ではないだろうか。小学校と中学校での活動に一貫したカリキュラムを望みはしないものの、指導方法と内容については、やはり相互理解が必要であると思われる。また、何度も強調していることではあるが、最初が肝心であるから、小学校内だけでの英語のスタートよりも、中学からのJTEを導入しての出発が良いのではないかと考えられる。このことが小学校、中学校の連携にもつながるという考え方は、多くの先生方の中にもある。小学校の挑戦とともに、これから生徒を受け入れる中学校側は、今後柔軟な対応が求められるであろう。

いずれにせよ、何を教えるのか、どのように教えるのか、という大きな課題に対しては、研究開発校の実践や様々なセミナー等を活用しながら、じっくりと取り組み研究していく必要がある。

8. 中学校英語教師のコメント

研究開発指定校で、一足先に英語教育を受けた生徒が入学した中学校の先生方の小学校教育に対する意見をお尋ねしたが、具体的なコメントを紹介しておきたい。

調査は1998年と1999年の2回にわたって行ったが、()の中の数字はA先生、B先生・・・と解釈していただきたい。また、()の前の数字は特定の、中学につけたナンバーと考えて欲しい。すなわち、25 (1)、25 (2) はA中学のa先生とb先生という意味である。

Q1 研究開発校出身者は、小学校では「聞く・話す」を中心に活動し、中学校で初めて「読む・書く」の活動を行ったわけですが、生徒に「読む・書く」ことに対する期待感や戸惑いのようなものはありましたでしょうか。また、中学校で本格的に英語を学習するようになり、生徒の英語そのものに対する興味や学力差のあらわれ等、お感じになることがありましたらお書き下さい。

28 (1)・英語嫌いになるのは、読む・書く、特に“書く”ことが原因。

英語の綴り方に慣れるのにも時間がかかり、気の毒。これが無ければいいのに・・・。

28 (2)・(子どものアンケートより) 小学校のは単なる遊びであり英語じゃない。

せつかく小で親しんだ英語を中の「読む・書く」へどうつなげていくかが今後の課題。中での教科書を使った学習では、今までの生徒と比較しなんらメリットが感じられない。

13 (1)・「聞く・話す」活動は、ほとんどの生徒が好んで積極的に授業に参加。

音声と文字とのギャップが多少ある。特に、英文を書いて覚える課題は面倒くさがる傾向あり。

13 (2)・13 (1) と同意見

2 (1)・1年の1学期は反応に違いが見られたが、2学期以降は大きな差は見られなくなった。

2 (2)・興味・関心の差はあまり感じない。むしろ初めて学習する生徒の方が新鮮で、頑張ろうとする姿勢あり。書くことに対する抵抗感が大きい。出来る・出来ないというよりも、普段から書くことに親しむ機会が少ないせい、面倒という気持ちあり。

2 (3)・戸惑い等は特に見られない。

20 (1)・小学校で「聞く・話す」の活動をしているので中学1年で初めて英語を学習する子どもとかなり差がある。(文字指導)

20 (2)・英語に対する興味の差が一段と激しくなって入学してきている。しかし、外国人に対して偏見もなく普通の先生として接している。全体的に書くことが苦手。

20 (3)・書くことについては多少困難な面あり。

8 (1)・入学当初は多少の差あり。書く作業に入ると差はなくなる。高学年になるにつれ、小学校時代の経験も薄れてくる。

8 (2)・全体的に「書く」能力が著しく低下。板書を写すだけでも以前の2～3倍。

書く練習を極端に嫌う。

9 (1)・進んで読もうとする意欲が高いように感じる。

9 (2)・生徒は、既成の文章を読んだりすることにそんなにも関心を示さない。むしろ、自分のオリジナルな文を作る方が好きのようだが、英語で表現することになると、なかなか思うようにいかない。また、出来た文を友達と会話形式で発表したり、自分で発表することは好きである。

22 (1)・小学校でしていたことは、英語の能力を開発することではなく国際交流の視点にたった異文化理解の授業が主なので、特別視せずむしろ他の生徒と同じようにすすめることが大事。

12 (1)・学力の差はないが、英語やALTに慣れている。英語授業に意欲的である。

6 (1)・音で聞いたことを文字にすることや文字で表すことに驚きと不思議さを感じている様子。この点で、1年生のアルファベットの音声指導の重要性を感じる。また、指導内容は生徒が興味のあることをどのような方法で指導するかである。

16 (1)・「読む・書く」が学習に入ってくると、少しずつ話す意欲や反応が低下してくる感じ。中1から中2とすすむにつれて、書く・読むことが出来ない生徒が増加。指導を増やすと聞く・話すことが低迷する。

16 (2)・話すことでは、開発校出身者の方が積極的。スピーチをさせても、ある程度の学力がある生徒は辞典を使用し、新しい表現も使おうとする。教科書を使用せず、会話のペアワーク、ゲームを好むが、同じ文でも教科書を使用することを嫌がる。

19 (1)・話せると思っているためか、書くことは面倒でやる気をみせない。

- 1 9 (2)・書くことに対して積極的に取り組める者と嫌がる者との差が大きい。
- 8 (1)・小学校の流れそのものだという、中学校の英語の授業の偏見を持っているので、特に「書く」ことに対して面倒がる態度が見られる。
- 8 (2)・「書くこと」は難しいことだが、能力の低い生徒でも何とか書いてみんなについていこうとする姿勢が見られ、意欲の高さを感じる。
- 1 7 (1)・実際、クラスに数名は文字と発音の関係に違和感を持ち、ついていけなくなっている。ローマ字に充分時間をとらねばならなくなってくる。
- 2 (1)・中学校の英語学習は“スタートはみな同じ”ということで、開発校出身以外の生徒もみな平等にみているので、出身者だから・・・という見方はしていない。親の方も同様にそう思っている。差があるなしの考え方は、あまり好ましくないと思う。
- 2 (2)・聞く話すという面では、英語に慣れ親しんでいるといった感じがある。読む書くことには、戸惑いよりも期待度が強い。学力差は特に感じない。
- 1 6 (1)・書くことに抵抗を感じる生徒がいる。学力差も出ている。
- 1 9 (1)・小学校では、ゲームを中心とした「聞く・話す」の活動が多かったため、中学校では英語の授業は遊べると思って入学してきた1年生がいた。2年になってから「読む・書く」が定着してきた。
- 1 9 (2)・「聞く・話す」活動に対しては、意欲的に取り組んでいるようだが、「読む・書く」活動については、学力差があらわれている。
- 1 9 (3)・小学校で学んだことが、中学校で学習していく上での自信や意欲につながるところまではいっていないような気がする。
- 2 4 (1)・学年のカラーにもよる。読む書くことには興味を持っているが、身につけるにはコツコツと努力する面も必要なので、他の勉強と同じように興味や学力差があらわれる。小学校でやったことが必ずしも生徒の学習意欲を継続させることにはつながらない。
- 2 7 (1)・2学期になると、生徒個人の個人差が大きい。
- 2 7 (2)・ほとんどの生徒が興味を持っているが、小学校で苦手意識が芽生えた者は、それをなかなか払拭できない。生徒の中には、小学校で書くことを教えて欲しかったという声が多い。
- 5 (1)・1年次では「話す」活動を喜ぶ生徒が多かった。
- 2 9 (1)・英語に話すことに興味はあるが、単語の書き取りも教科書の学習について必要であることをなかなか理解出来ない。
- 2 9 (2)・特に差はないが、文字と音のつながりがなんとなくわかっている生徒は多い。
- 2 4 (1)・確かに小学校から英語を学習した生徒達は「あっ、知っている！」という表現が多いようにも思うが、TVをはじめ英語にふれる機会が多くなっている現在、生徒の個性・性格に応じての差はあるものの、小学校間の差はあまり感じない。よって、「書く読む」活動に対する戸惑いも特に感じない。
- 2 4 (2)・小学校での授業でALT慣れやTT (Team Teaching)慣れは感じるが、他校から来た生徒も同じように興味を持っており差異は感じられない。結局、文字指導が入った時点で全員が同じスタートラインに並ぶという感じ。
- 1 (1)・学力差はさほど感じない。外国人を前にしたときの緊張感是他校の出身者よりも低い。
- 1 (2)・はじめは他校出身者に比べて、英語を聞くことに慣れているためか、優越感を持って取り組んでいるが、やはり個人差があって、時間が経つにつれて、好きな者はよく取り組むし、嫌いな者は意欲がない。
- 1 (3)・目や耳から入るものは得意かもしれない。興味関心が高い。

Q2 研究開発校の中には、中学校の英語教師がALTの代わりに専任教師として入るケースや、ALTの助手役として働くケースが見られましたが、この点についてのご意見をお聞かせ下さい。

- 28 (1)・日本人教師と異なるアイデア（感覚）を用い指導にあたることで、会話力をつけられていると感じる。リスニング力も高まる。
- 28 (2)・中学の教師が入るべき。小学校の先生への負担や指導の系統性を考えると。
- 2 (1)・小学校の先生方の負担を考えるとやむをえないと思うが、地域のネイティブを学校に招くなど、ALTでなくても教えられる人はいるのではないのでしょうか。
- 2 (2)・小学校でどのような英語学習をし、児童の学習状況の実態を把握するためには良い。中学校の英語学習（実態を踏まえた）に参考にしやすい。ただ、中学校の英語教師への負担もある程度考えた上でないと、なかなか難しいのでは。
- 20 (1)・中学校教員がかかわるべきものではない。
- 20 (2)・子ども達も、より興味を持って取り組めるのではと思う。小さいころから、ネイティブによる発音の指導が得られるにこしたことはないと思う。
- 20 (3)・交流として公務に問題がなければ大いに結構だと思う。
- 20 (4)・やはりALTによる英語導入が望ましいと考える。
- 18 (1)・中学校も忙しく、小学校にまで出向くのは不可能に近い。
- 8 (1)・それぞれの役割があるのでこのようなケースは考えられない。
- 8 (2)・ALTが入る限り、専門の英語教師がつくのは必要だと思われる。
- 9 (1)・時には、JTEが主になったり、あるいはALTが主になったりして話し合いによって主か補助かを決めてはどうか。
- 9 (2)・児童理解をしているのはやはり小学校教師なので、よく事前の話し合いをした上で、中学校教師が手伝う形で行うのが望ましいと思う。
- 22 (1)・ALTの助手として働く場合は良いと思うが、ALTの代わりというのはあまり賛成出来ない。
- 22 (2)・とても良いことだと思うが、小学校の先生方の中に英語を話せる方がおらずALTが困っているという現状。教えるのであれば、専門的な英語教諭を小学校にも配置すべき。
- 12 (1)・ALTがいない学校では仕方ない。
- 6 (1)・児童に知識理解をさせるための専任は不必要。生の言葉等を直接話すALTがベスト。日本人専任はその袖助役になり、指導法を援助するのが良い。
- 6 (2)・英語教師はALTの助手役の方が良い。ネイティブとのインターラクティブの方が良い。
- 6 (3)・中学から小学校へ教えに行くのは負担が大きいと思う。
- 16 (1)・お互い何をやっているかわかるし、一貫教育という面でも有効。
- 16 (2)・なるべくALTのみで授業をやる方がよいと思うが、なかなかALTの意図が通じないときに、日本人教師が補助するのはやむを得ない。
- 16 (3)・音声感覚を大切にする小学生なので、ネイティブの方が良い。
- 16 (4)・どんな形にしても、ALTはいるほうが良い。
- 19 (1)・良いことだと思う。(同意見あり)
- 8 (1)・初めは、中学校教師が入るとしても、次第に小学校の先生方でできるように支援していくべき。
- 8 (2)・小学校の方から協力をいただきたい旨の話があれば積極的に協力すべき。
- 8 (3)・小中の英語教師の交流もあってよい。
- 17 (1)・ALTではなく一年を通して、一人でELT(English Language Teacher)として責任を持って(評価を出して)授業を進めてほしい。日本人教師に生徒が頼らなくなるので。
- 32 (1)・小学校の先生方がしっかり英語を学習し、できるだけ担任とALTという形で指導するほうがいい。生徒とともに英語を学習しようとする姿勢が生徒の学習への意欲を高めることにもつながる。
- 2 (1)・どんどんAETが入って、国際感覚を身につけさせて良い。(同意見あり)

- 2 (2)・小学から中学への指導につながりを考える面でよい。ただ中学教師の負担についてはどう考えたらいいか・・・。
- 16 (1)・目的に応じはか否かわかる。ネイティブの発音をきかせるのであればALTが有効であるし、ライティング指導に関してであれば、JTEが二人いるほうがメリットのある場合がある。
- 16 (2)・担任の先生が英語やALTを苦手としている場合もあるため、中学校の英語教師が小学校英語にかかわることについて賛成。
- 19 (1)・ALTの経験や力量がどうかということによる。
- 19 (2)・要請があれば、可能な範囲で入ることもあっていいかもしれない。
- 19 (3)・小学校の現場をあまり知らないが・・・英語に関して専門的な知識を持っている者が専任あるいは助手として入る方が良いと思う。
- 24 (1)・小学校では担任がもっとかかわるべきで、担任が変わらなければ子どもは変わらない。中学校の教師が入っても意味はないと思う。
- 27 (1)・それだけに専念して従事できるのであれば、精神的に中学校を教えるのよりも楽しい。
- 27 (2)・一見良い方法のようだが、英語教師の本来の仕事の上にプラスされるのであれば、負担が大きくなりすぎる。配慮があればいいかも。
- 5 (1)・助手として入ることは良いがALTの代わりはどうか・・・。帰国子女等ならいいでしょうが、それより外国人と触れ合うことに意味がある。
- 29 (1)・中学校教師にとっては大きな負担だろうから、やめた方がよい。
- 29 (2)・小中の連携にもつながり、良いのではないか。
- 24 (1)・小中学校間での連携が十分にとれている状況ならば、良いことだと思うが、十分な話し合いや共通理解もないままに中学教員が小学校へ入っても成果が上がらないと思う。
- 24 (2)・何を教えるのかということがはっきりしていないと効果がない。また、JTEがネイティブなみに発音できていなければALTとのTTを越えることは難しいのでは。
- 1 (1)・ALTの助手としてならよいが、やはり小学生にはネイティブの生の英語に触れることに大きな意味がある。
- 1 (2)・ALTだけでよいのでは。

Q3 小学校で英語教育が実施された場合の中学校での指導法や、小学校英語教育に望むことなど 研究開発校の卒業生を受け持たれてお感じになることがございましたら、どんなことでもよろしいですのでお書きください。

- 13 (1)・福井で行われているCommunication Class (CC) であれば、小学校でやったことを深められるし、又、小学校でやっていなくても聞く・話すは十分やれる。
- 13 (2)・小中間での指導内容、方法等の相互理解
- 28 (1)・中学校へつなげるために、日常使われるようなフレーズや単語の読み方を工夫して授業に取り入れていってもらいたい。
- 28 (2)・フォニックスの指導はきちんとすべき。高学年の生徒は、母語が確立しているので模倣だけでは発音があいまいになる。
A～Zの音 [アブクドゥ・・・] は教えた方がいい。
- 18 (1)・ローマ字ができていないので困る。
- 2 (1)・日常的に使う会話の習得を最優先に考えたい。読み・書きの能力は、中学校の段階で学習できるから、話そうとする意欲を高められるような指導・活動を望みたい。
- 2 (2)・小学校教育で、学校独自で題材を用意するときは、それが難しいと思う。そのためには、小学校の学年毎に指導目標や言語材料が決められ、教科書という本(文字)よりも視聴覚の教材が全部の小学校に用意されるとよいと思う。

- 2 (3)・音声指導に重点を置くのが良い。特に、話すことに抵抗なく取り組めるのが望ましい。
- 20 (1)・小学校では音声指導のみなのでライティング活動の時は、他の生徒と同様に集中して出来ている。スピーキング活動の時も、積極的に取り組んでいる生徒が多く、他の生徒に良い影響を与えられている。
- 20 (2)・能力の向上や成果を望まず、あくまでも楽しい興味深い授業であって欲しい。
- 20 (3)・やはり、会話など、幼いころから耳で感じていくと、習得が早いように思う。
- 8 (1)・小学校で何をどの程度教えているのか、中学校で知っておきたい。
研究開発校以外の生徒と混合で授業をするが、4月当初は、開発校以外の生徒が動揺。しかし、半年もたたないうちに全く差がなくなるのはなぜか？
- 8 (2)・低学年ー興味付け、高学年ーローマ字、書くことはやってきて欲しい。
- 8 (3)・小学校で2領域しかやっていないので、そのギャップが大きい。アルファベットやローマ字も扱うべき。
- 9 (1)・それぞれの小学校で学ぶ学習内容をある程度統一してもらいたい。そうしないと、中学校でのスタートがしにくい。スタート時に学力差が起こるため。小学校で何を学んだのかを知りたい。
- 9 (2)・小学校では、身の回りのものを英語で何というのか、もっともっと単語力をつけたらよいのではないか。
- 9 (3)・小学校で先に英語教育を受けている生徒は必ず音声面で教室のリーダーとなって、クラスを引っ張る立場になるので、他の生徒にいい影響を与えていると思う。
- 22 (1)・小学校の時に、もっともっと学習し、身につけておくべき国語力・算数力の低下を感じる。
小学生英語→中学生英語→高校入試(高校生英語)→大学入試→採用試験・・・この大きな流れを見て、一部の変更ではなく全体でとらえて欲しい。
- 12 (1)・入門当初、英語に関心があり、意欲的であり、他校出身者に大きく影響を与え役に立っている。
- 6 (1)・あまり早く知識を詰め込まずに、国際文化への興味・関心を向けて英語学習への意欲づけ程度にした方がよい。
- 6 (2)・文法事項よりもコミュニケーションへの意欲・楽しさを中心に指導されたい。
- 6 (3)・対話することの楽しさを味あわせる。
中学校では更に内容的に発展充実した対話の楽しさを味あわせる。
- 16 (1)・能力を自らもう見極めてしまったかのように英語に反応しない子が極少数だがいる。：そうならない指導方法を考えていく必要がある。
- 16 (2)・簡単な日常会話・音声指導・ゲーム・歌など、英語の初歩的なものを学習し、英語に興味をもつような指導を行っていただくと効果的。
- 16 (3)・小学校では、あまり文法にこだわらずコミュニケーション中心の授業でよい。積極性は身につけていると思う。
- 16 (4)・小学校でどんなことを学習したのかのたでの連絡が何もなく、小学校でやったものが生かせていない気がする。
- 19 (1)・文字指導も必要ではないか。(読むという観点で)
- 19 (2)・小中の連携が必要。
- 8 (1)・小中高という流れの中で段階を明確にすべき。
- 8 (2)・学習内容を段階的に習得させていくべき。
- 17 (1)・ALTをELTにして、常時授業を行って欲しい。
- 32 (1)・ローマ字が全く理解できていない子は、中学校での英語学習に大きく影響するので、ローマ字をしっかりと学習させてほしい。あとは、生徒の英語に対する興味を高めるような指導が小学校ですべてできているともっとよい。

- 2 (1)・小中での互いの実践を話し合う場を持ち、指導の系統性をもたせたい。小学校でのコミュニケーション的指導は、意欲を高めるためによい。
- 2 (2)・小学校で英語を少しでもやってもらえるなら、ローマ字指導は最低限やって欲しい。
- 2 (3)・聞く話す活動を中心に指導して、少しでも英語が自然に口から出るようにして欲しい。
- 16 (1)・ローマ字の指導。
- 16 (2)・小学校での年間指導計画が中学校に送られると助かる。
- 19 (1)・早い時期から英語嫌いを作らないように願いたい。また、なぜ英語が必要なのかその必要性が定着していれば中学生になっても意欲的に取り組むことができるのでは。
- 19 (2)・今までと同じようにコミュニケーション活動の充実を図るとともに、「読む・書く」活動にも力をいれていく必要がある。
- 19 (3)・音声指導を中心に、日常生活に必要な基礎的な単語や簡単な表現に慣れさせること。英語で英語を教えることを望む。
- 24 (1)・小学校では自由な中で小学校の時にしかできないことをして英語を楽しんだらいい。中学の準備という発想はいらない。
- 27 (1)・小学校で楽しい英語に触れ、興味関心の高まった生徒に関してはいうまでもない。しかし、すでに苦手意識のある生徒はかなり大変。「受験」を考えた場合、楽しいだけでは力にならず、そこを考えずに中学校の英語指導はありえないので日々、準備に大変。
- 27 (2)・小学校では、本当に”楽しい”ということだけでいいのだろうか？小学校で楽しい活動に慣れた生徒の興味関心をひくのはかなり準備が必要で大変。
 - 7 (1)・アルファベットを書けるようにしておく。
 - 5 (1)・ゲーム中心の楽しい授業をして欲しい。できれば、評定等はだしてほしくない。外国人に臆することなく接する態度を身につけて欲しい。
- 29 (1)・英語教育を先にやったからといって、語学への関心や国際的な関心が上がるとは限らない。学習習慣もろくに付けていないので、中学校としては大いに迷惑している。
- 29 (2)・指導法の違いに子どもたちがとまどいを感じるのではないか。

小学校で「英語教育」をするのであれば、音声、アルファベット、ローマ字（ヘボン式）をしっかりと身につけさせて欲しい。また、到達の度合いも見た方がいい。国際理解や外国人との触れ合いに視点を置くのであれば、もう少し比重を減らして、その他の基礎学力、学習習慣を身につけさせて欲しい。
- 24 (1)・人前で話すこと自体あまり好きでない子もいると思うので、「英語はアクションをつけて大きな声で話さなければいけない」というようなスピーキングに対しての苦手意識を持たせないように配慮してすすめて欲しい。
- 24 (2)・小学校では、「会話は楽しい」ということと、基本的な英問英答ができれば十分だと思う。思春期に入り、心理的なバリアが出来る以前に少しは会話ができるという自信をつけておけば中学校でもある程度積極的にコミュニケーションを図ろうとするのでは。
 - 1 (1)・全国の小学校でフォニックスを学習してから中学校へ行くと非常にスムーズに英語が身につくと思う。
 - 1 (2)・評価をしないということなので、クラブ活動的な学習であろうと思うが、小学校で学習したことはあまり生かされないと思う。結局、英語学習が好きな子はどんどん身につけていくと思うがそうでない子にとっては馬耳東風で大した学力に身につかないのでは。
 - 1 (3)・ゲームや楽しみだけでなく、教科として確立して欲しい。

Q4 小学校と中学校の連携については、今後ますます話題に上ることが多くなると予想されますが、この連携についてどのようにしていったらいいのか、お考えをお聞かせ下さい。

- 8 (1)・ある程度中学校の先生の意見を聞き、生かして欲しい。中学の受験を意識した英語教育を

否定する小学校の先生もいるが、中学の置かれている立場もあり尊重する姿勢が欲しい。

- 8 (2)・相互理解のため、時には現在の状況を連絡し合う。
- 8 (3)・お互いの授業参観はもちろん、小・中一貫の先を見通したカリキュラムは必要。
- 13 (1)・公立小学校で完全実施となった場合には小学校にも英語科教員 (JTE) を配置すべき。
- 13 (2)・会話を同一線上におきやっていくべき。
- 28 (1)・連携は必要。小・中の指導に段差がありすぎて子どもに戸惑いあり。
- 18 (1)・高校入試から英語をなくせば、もっと実用的な英語になっていく。
 - 2 (1)・互いの授業参観や情報交換が必要。
 - 2 (2)・各小学校毎にやり方が違うのでは、連携が難しく、中学校独自になると思う。
やはり、文部省で指導書なりマニュアルが必要。
 - 2 (3)・実際は、連携は無理では？
- 20 (1)・中学校の1年の最初は小学校ですでに学習しているものばかりになる。
どこまでのレベルかを知って連携を密にすると、さらに深まった会話ができるようになる。
文字指導への移行をスムーズにしないといけない。
- 20 (2)・小中一貫校もできつつあるようで、どんどん交流を深めたい。
- 20 (3)・学校全体の問題としてとらえることが大切である。
 - 9 (1)・互いに連携を取りながら、早期英語教育が実現されるように願っている。
 - 9 (2)・小学校から中学校に依頼して、中学1年の導入レベルからの聞く、話す活動案を参考にさせていただく。小学校の担当教師がもっともっと中学校の授業参観に出かける。
 - 9 (3)・小学校で生徒が何をどの程度学習したのかを中学校に教えていただけたら授業がぐみやすいと思われる。
- 22 (1)・情報交換を密にする。(情報公開や協議等)
- 22 (2)・小中で同じALTということが難しいと思うが望ましい。
- 22 (3)・大きな流れ(小学校→大学)にそって、連携は必要。
- 12 (1)・いくつかの小学校がひとつの中学校にくる場合、英語の学習内容はある程度同じにしなければならないのでは。
- 12 (2)・小学校では、細かい文法事項にこだわらずに、とにかく英語に慣れる機会を多くして、「英語は楽しいものだ」ということを感じさせて欲しい。
 - 6 (1)・連携は不可欠で、市町村レベルで方向性を出す必要がある。問題は、現在の高等学校等への受験科目になっていること。内容の改善あるいは受験科目からなくすことが必要。
 - 6 (2)・小中の教師の研修会。
 - 6 (3)・小学校で何を学習したのかを連絡してもらえればよい。年間の学習計画と言語材料など。
 - 6 (4)・中学校だけの教育で精一杯。連携までは無理。小学校でこの程度まで教えるといったガイドラインを設けたらどうか。
- 16 (1)・本格的に小学校の英語教育が始まれば、マニュアル化されると思うが、今の段階では何もないので小学校側から、扱ったものについての申し送り等あるとよい。
- 16 (2)・小学校でやったことを繰り返すのでは、中学の英語の授業が陳腐なものになってしまう。中学側は、小学校でどの程度まで習っているのか、授業内容を知っておく必要がある。
- 16 (3)・小中通しての目的と学習内容ははっきりとするべき。小学校でやったことをつかめるようにしなければ、指導・授業の工夫、もりあがりを考えられなくなる。
- 19 (1)・小中同じ生徒ならとてもいい効果をあげられるが、すべて研究開発校出身とは限らないので、その兼ね合いが難しい。経験者にとって中1最初のレベルのものは意欲を減退しかねない。以前に比べて、中1生徒の英語に対する熱い気持ちがあまり伝わってこない。
- 19 (2)・小学校での授業内容を知っておくことが絶対的必要。
 - 8 (1)・風通しのよい話し合いができる場が数多くあればよい。場合によっては高校との連携を模

索することも必要。

- 8 (2)・教師の交流。
- 8 (3)・授業研究会等を開いて、お互いに学び合うことが大事。
- 2 (1)・中学教師が小学校で行われていることについて知る必要がある。
- 2 (2)・全小学校に英語も入ってくるのであれば、研修等も必要である。
- 2 (3)・まず話し合う機会を提供して欲しい。
- 16 (1)・小中英語部会あるいは研修会などを年に数回開催するとよい。
- 16 (2)・小学校で教えている内容がどんなことなのかを中学校は理解すべき。
- 19 (1)・カリキュラムの交流、教師間の交流ができればよい。
- 19 (2)・本町では、小学校国際理解教育推進委員会という組織があり、その中で英語の授業（小学校）について考えるカリキュラム作成委員会が設置されている。
小中のALT 2名と小学校教務主任、中学校英語科担当教員がメンバーであり、実際の活動は十分にできていないが、2名のALTを中心に進められている。
- 19 (3)・お互いに授業が見学出来る機会が必要。指導内容の交流も必要。
- 24 (1)・お互いの実践をまず教師自身が知ることが第一。
- 27 (1)・これまで、中高の連携もそれほどなされていないのを考えると、時間的に難しいのでは。英語指導を通じて育てたい生徒像の明確化が必要。
 - 5 (1)・お互いの授業を見学するのが必要。学期毎に公開授業等を設置して交流を増やしていくと良い。
- 29 (1)・生徒指導の強化。
- 24 (1)・公開授業等、お互いに「何を」「どのように」しているのかを分かり合うための場と時間をなるべく多くとっていただけるとよい。
- 24 (2)・中学校教師が小学校から英語教育をどう始め、どう引き継ぎいくかについてビジョンを持っていなければ、本当の意味での連携はできないと思う。
 - 1 (1)・お互いに時間が無いが、相互に授業参観をするのが方法の一つ。
 - 1 (2)・小学校英語教師が体系化されていない状況では、何を話せばよいのか分からない。
 - 1 (3)・小学校で学習することと中学校で学習することをしっかり区別すること。

Q5 最後に、国際理解に通じる英語教育とはどのようなものであるべきか、お書き下さい。

- 20 (1)・語学はあくまでも手段であり、目標でないことを自覚すべき。
- 20 (2)・4技能の基礎をしっかり身につけることが最も重要。真の国際理解はコミュニケーション能力なしには進めることが極めて困難となるから。
- 20 (3)・外国に対して偏見なく理解でき、もっと外国を身近なものと感じて欲しい。
全世界的視野で物事が考えられる人間を育成すべき。
- 20 (4)・技能面で優れている方がいいが、日本文化や日本のことも理解し表現できる教育が大切。
 - 2 (1)・外国での国際理解というものが存在せず、日本という国での国際理解をどうすべきかの手立てを考えねばならない。
 - 2 (2)・文献からの学習もあるが、やはり各国の外国人から独自の言語文化・生活文化を習得するところに大きな意味がある。ゲストティーチャー等を多く招く機会を持ち、直接コミュニケーションをとることが効果的。ますます多くのT・Tを取り入れてもらってはどうか。
 - 2 (3)・西洋人は偉い、カッコいいという思い込みやコンプレックスのない、島国や異文化を認め合い思いやりのもてる関わり方や、逆に外国での犯罪や安全面を理解させ、またNOと言える毅然とした態度がとれる日本人を育てたい。
 - 2 (4)・ALTなどから、出身国の文化についての話を聞いたり、実際に海外とのつながりを持たせたりすることが出来れば良い。

- 2 8 (1)・ALTが教えることが国際理解ではない。日本という孤島にいながらも色々な人種や言葉や文化を知り見つけていくこと。その人々と「英語」という道具を使って、相手の立場を考え、自分の考えをきちんと伝えられるような日本人を育成していくこと。
- 1 3 (1)・異文化理解というかそういうことに触れる中で、日本についてもっと知るべきだということに気づき、英語でそれを発信するようにしていきたい。
- 1 3 (2)・国際理解をするためには、一人ひとりが意志の疎通ができることが必要。
そのためには、英語をコミュニケーションの媒体として自由に使える能力を身につけさせることが大切。その能力とは、ペーパーテスト等で良い点をとるのが目標ではなく、まず、言葉（外国語）が使えて、外国の人とコミュニケーションできることは、非常に楽しいことだと実感できる評価や場を多く与えることが大事。
英語を学ぶこと、使えることの本物の楽しさが分かってもらえる授業はどんなものかを考えていきたい。この意味で、高校入試や大学入試が変わらなければ本当に言葉を学ぶことの大切さや楽しさを体得することは難しいのではないかと考える。
- 1 3 (3)・授業数が多く、1学級40人では不可能に近いこともあろうが、出来るだけ Review Questions などを取り上げ、warming up を行う。また、どんなトピックでもいいから自由に生徒に話す機会を与える。
- 8 (1)・コミュニケーション能力が最近叫ばれているが、大切なのは・自分の意志や考えを持つこと、自分のいる土地や国の文化、言語、歴史をしっかり知ること・・・から始まる。
- 8 (2)・まず、自国についてよく知ること。自国の国語をきちんと話したり、書いたりすること。
- 8 (3)・受験と切り離すことが必要。また、英語圏だけでなく様々な国について知ることが大切。
- 9 (1)・中学校も教科書をなくし、入試科目から削る。もっと学校独自に自由にゆとりを持って深まりのある国際理解ができるためには。
- 9 (2)・お互いに国の違いを理解した上で相手の立場や考えが分かるのが国際理解だと考える。
- 2 2 (1)・単に英語の4領域にとどまらず、真の意味での文化交流ができる能力を身につけさせ、英語圏だけの国に限定せず文化にふれさせること。
- 2 2 (2)・日常会話で満足する人、手紙も書いて満足する人、英語を使って商談・研究ができ満足する人。人によって異なる。
- 2 2 (3)・積極的に場面に応じたコミュニケーションがはかれること。
- 6 (1)・知識ではなく、積極的にコミュニケーションしようとする態度や能力を育てること。
- 6 (2)・第1に小人数のクラス。
- 6 (3)・自分を知る、自国を知ることから、他文化の理解・尊重なのではないかと思う。
- 6 (4)・自国の文化等を深く理解するばかりではなく、他国の文化等にも関心を示し、ひいては互いにそれらを分かちあうことができる英語教育を目指したい。
- 1 6 (1)・寛容な心、広い目、豊かな感性、たくましい好奇心を大切に育て、言葉や動作の多様性を理解し、自ら使えるようにしていくこと。
- 1 6 (2)・スラスラしゃべるだけが目的ではなく、何か自分の意見を主張し、意志の疎通を図ることが大事。手段としての英語をめざすべき。
- 1 6 (3)・ALT等のTTを中心にした学習や、ALTがLT(Language Teacher)として働くこともいいのでは？
そうすれば、その人の個性が生かせ、生徒も学ぶことがある。
- 1 9 (1)・コミュニケーション能力の育成に的をしぼりたい。
- 1 9 (2)・話せることも大事だが、異文化理解に重点を置いた方がよい。いろいろな国の人との交流や文化体験、コミュニケーションは中学に入ってからでよい。
- 8 (1)・英語の時間はできるだけ英語を聞き、理解し、英語で話す場を多く設定すべき。また、ALTとの授業では、授業の組み立ては日本人教師がリーダーシップを取るにしても授業

- ではALTがリーダーシップを取ることがあっても良いと思う。
- 8 (2)・英語で相互文化を理解出来、日本文化を諸外国に英語で理解させる。言葉は文化である。
- 8 (3)・最終的に自分の意見、考えを他人に伝えることができる。他人の意見、考えを自分なりにくみ取ることができると良い。
- 3 2 (1)・ただの語学学習にならるように、文化的なことを多く取り入れた教育が大切。
教科書の内容を教えるだけではただの教科の学習で終わってしまう。ALTとの触れ合いを通して国際的感覚をみつけられればよい。
- 2 (1)・自らが自分の考えを言い、相手の考えをきき、互いをわかりあおうとする態度の育成。
- 2 (2)・英語を積極的に話せない日本人が多い中で、それが一番の問題点。とにかくネイティブスピーカー等との会話などを通して積極的に話す機会を多くして活動させたい。
- 2 (3)・英語を学ぶこと自体が目的ではなく、英語を学ぶことにより広がる可能性について教えられればと思う。
- 1 6 (1)・国際人＝英語がしゃべれる・・・と勘違いする人が多い。英語はあくまで一つの道具に過ぎない。大切なのは自国のこと、自分の考えを持っていること、誇りを持つこと。うわべだけの英語を身につけても国際理解とはならない。
- 1 6 (2)・人間的にきちんとしている子どもの育成が先だと思う。国際社会で通用するよう、英語だけでなく礼儀や考え方も含めた「国際理解」教育が必要だと思う。
- 1 9 (1)・多様なものの見方や考え方を理解し、これらを尊重する態度を育てる。又、国際社会に生きる日本人としての自覚を高め、国際協調の精神を養う。
- 1 9 (2)・本校では、国際理解教育の柱とし、オーストラリアのハイスクールと姉妹校盟約を結んでおり、隔年ごとに相互訪問している。ホームステイ先や日常的に使われているより実際の場面を想定して、コミュニケーション活動を行うことが有効であると思われる。
- 1 9 (3)・教師自身が国際感覚を持って教育にあたること。そのために研修を積み重ねなければならない。実際に諸外国の学校と交流し、目で見、肌で感じることも必要。
- 2 4 (1)・英語や外国人に臆せず接していこうとする態度。違いを認めたり、同じところを共感できる態度を育てることが大切なのは。
- 2 7 (1)・自らの生活・文化・歴史等をよく学び、誇りを持って語ることのできる人間の育成。
ストラテジー能力の育成も必要ではないか。
- 2 7 (2)・相手の立場に立つという考えを養うもの、と同時に誇れる・・・。
- 5 (1)・長文読解でなく空欄うめではなく、自分の意志を伝えようとする意欲と英語を発する勇氣を持ち、自己表現のできる人間を育てることから始まると思う。
- 1 2 (1)・日本人以外の人種に接し、言葉は完全に通じなくても、他の国々の人々の生活様式や考え方をすることは、とても大切なことである。そういう面でも国際交流集会などを数多く取り入れたらどうか。(小中どちらも)
- 1 2 (2)・道徳等もからめたり、単に会話を教えるのではなく、外国では今何が起きているかなど社会情勢も含めながら、外国人が日本人に対してどう感じるかなども話題にしてもいいと思う。
- 2 9 (1)・英語教育に負担がかかりすぎ。時期が早すぎる。
- 2 9 (2)・英語教育が国際理解に直接通じるとは思わない。自分とは異なる人種・文化・考えなどを偏見なく受け止め、理解しようとする”心”を育成することが先決。そのような心を持つてはじめて英語が国際理解の手段として生きてくると思う。英語教育が世界に目を向けるきっかけにさえなれば良い。
- 2 4 (1)・根底にあるのは、人間愛だと思うので英語教育だけで人間性や道徳性を高めていくことはできないと思う。全教育課程で、国際理解をすすめていってほしいと思う。
(国際理解だから、英語でやるという考え方ではなく)

24(2)・英語という言葉を通してある程度の国際理解は出来ると思うが、それよりもまず、どうやって子どもたちの心を豊かにしていくかを考えないと真の国際理解はあり得ないと思う。授業や教材でどう子どもの心を掘り起こしていくかを教師が考える必要があり、字面だけを教えるからどう脱却するかを考えましょう。

1(1)・間違いを恐れずにコミュニケーションしようとする意欲を育てること。

より正しい英文にするための調べ方(辞書)が身につけていること。

人の意見を良く聞くとともに、自分の主張も出来る能力を育てること。

1(2)・やはり、現実の問題としては英語を使う(わなければならぬ)場面がほとんどない。そういうシチュエーションを出来るだけ工夫して設定していかなければと考えている。

1(3)・自己表現力、話したいと思う状況をつくること。

【全体を通じての考察】

個々の質問に対して、それぞれ多様な回答が寄せられたが、研究開発校で行われている国際理解に通じる英語教育の成果に好意的な評価を下す先生が少なくなかった。もちろん、辛口の批評も多く、「書く」ことに対しては消極的であるという意見が特に目についた。その他、始めは積極的でも数ヶ月経過すると他校からの生徒とあまり変わりなくなるという意見も多かった。このような成果に対して否定的評価をしている先生方も小学校英語教育自体を否定している人は少ないように思える。

また、中学校と小学校の関係者がお互いに授業を公開をしたり、情報を提供することの重要性を述べている人も多いようである。このような双方の希望が実現されていけば、英語教育ばかりでなく小学校教育、中学校教育の充実・発展が期待できよう。小学校英語教育が教育改革の起爆剤となり得ることを期待したいものである。

V 中学校英語と小学校英語の比較

研究指定校で用いられている英語は、各校共通のものもあり、特色のある表現もある。そこで、研究指定校でもある岩手大学教育学部附属小学校で用いられている英語表現と、7社から出版されている教科書のうちNew Horizon English Courseで使用されている表現を比較してみた。

ニューホライズン/ イングリッシュコース1～3			岩手大学教育学部附属小学校	
1. 現在				
《Be 動詞・肯定文》	学年 1～3	U		学年 1～6
・ I am～.			I'm fine.	1
I am Yumi Hayashi.	1	1	I'm in the second grade.	2
Yes, I am./No, I am not.	1	1	I'm seven years old.	2
			I'm a ～.	2
			What am I?	2
			I am happy.	3
			I am great.	3
・ You are ～.				
You are Ms. Green.	1	1	How are You?	1
Are you Ms. Green?	1	1	Here you are.	2
			How old are you?	3
・ He/She is～.				
She is my friend.	1	2	He/She is my ～.	1
He is my friend.	1	2	He/She is a ～.	2
			His/Her name is ～.	3
・ We are ～.				

• They are ~.				
• This (That) is ~.	1	2	My name is ~.	1
It is ~.			This/That is Mr. (Ms)~.	1
Her class is interesting.	1	4	It's a ~.	2
			This is my ~.	2
			This is my friend.	3
			My favorite sport is ~.	3
			My hobby is ~.	3
			My birthday is ~.	2
			Here's some tea.	2
			Here's your change.	3
			This is ~ speaking.	4
			This is a present for you.	4
			There is (isn't) ~.	4
			It's ~ o'clock.	5
			That's right.	6
			That's great.	6
			It's at the end of ~.	6
			It's in the middle of ~.	6
			It's on the left side of the street.	6
			Here it is.	6

<p>《be 動詞・疑問文》</p> <p>• Is that a factory?</p> <p>Yes, it is./No, it isn't.</p> <p>Who is this?</p> <p>What is this?</p> <p>Where is Miko?</p> <p>When is your birthday?</p> <p>What time is it?</p> <p>Whose bike is this?</p>	<p>1</p> <p>1</p> <p>1</p> <p>1</p> <p>1</p> <p>1</p> <p>1</p>	<p>2</p> <p>4</p> <p>4</p> <p>7</p> <p>7</p> <p>8</p> <p>8</p>	<p>Is this/that ~?</p> <p>Yes, it is./No, it isn't.</p> <p>Is ~ there?</p> <p>Who is this?</p> <p>What's your name?</p> <p>What's your number?</p> <p>What shop is this?</p> <p>What's the matter?</p> <p>What is this?</p> <p>What country is this?</p> <p>When is your birthday?</p> <p>What is your blood type (treasure)?</p> <p>What time is it now?</p> <p>What is the price of this watch?</p> <p>Where is ~?</p> <p>What's wrong with you?</p>	<p>3</p> <p>4</p> <p>1</p> <p>1</p> <p>2</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>5</p> <p>5</p> <p>6</p> <p>6</p> <p>6</p>
<p>《一般動詞・肯定文》</p> <p>• I like music.</p>			<p>I like~.</p> <p>I have a cold.</p> <p>I have a headache.</p>	<p>1</p> <p>3</p> <p>3</p>

			I live in ~.	5
			I play ~ after school.	5
			I get up at ~.	5
			I have breakfast at ~.	5
			I go to bed at ~.	5
			I introduce him (her).	5
《一般動詞・否定文》				
• I do not like music.	1	3	I don't like ~.	4
			I don't know.	3
一般動詞・疑問文				
• Do you know this flag?	1	3	Do you like ~?	
Yes, I do./No, I do not.			Yes, I do./No, I do not.	
• How many eggs do you have?	1	5	What fruit do you like?	1
			What ~ do you like?	2
			How do you say ~ in English?	2
			How many ~?	3
			How many family do you have?	5
			What do you have?	3
			Where do you want to go?	4
			What country do you like ~?	4
			Where do you come from?	6

≪三人称単数現在≫ ・ Masao plays tennis. ・ Does Masao play tennis? Yes, he does./No, he does not.	1	6	He likes ~. She likes ~.	5 3
≪進行形≫ <肯定文> ・ Keiko is watching TV now. <疑問文> ・ Is Keiko watching TV? Yes, she is./No, she is not. What is Keiko doing?	1	9		
2. 過去時制				
≪be 動詞の肯定文≫ ・ I was in Brazil last month.	2	2		
≪be 動詞の疑問文≫ ・ Were you in Brazil last month? Yes, I was./No, I was not. ・ How long were you in Singapore?	2	2		

<<一般動詞・肯定文>> ・ I played tennis yesterday. I went shopping yesterday. I woke up at six this morning. It came from the south.	1 1 2 2	11 11 1 1	I went to ~. I enjoyed ~.	2 4
<<一般動詞・否定文>> ・ I did not play tennis yesterday.	1	11		
<<一般動詞・疑問文>> ・ Did you go shopping yesterday? Yes, I did./No, I did not. Did you wake up at six this morning? Where did the bird come from?	1 2 2	11 1 1	Where did you go? Why did you come here?	4 6
3. 未来時制				
<<肯定文>> ・ I am going to play soccer next Sunday. I will study Korean.	2 2	3 6	I'm going to ~. I'll have ~. I will tell you about ~.	6 6 6
<<疑問文>> ・ Are you going to play soccer next Sunday?	2	3	Where are you going? How long will you stay here?	4 6

4. 現在完了時制				
<<肯定文>> ・ We have been friends for ten years. ・ I have been in Japan for three years. ・ I have just finished breakfast.	2 3 3	9 1 2		
<<否定文>> ・ I have never been to the States.	3	2		
<<疑問文>> ・ How long have you lived here? Have you been in Japan since last month? Yes, I have./No, I have not. Have you finished breakfast yet? Have you ever been to the States?	2 3 3 2	9 1 2 2		
5. 比較級				
・ This building is taller than that one. This building is the tallest in the town. What is the longest tunnel under the sea?	2 2 2	8 8 8	Which do you like better, A or B?	6

Soccer is more popular than tennis.	2	8		
Soccer is the most popular in our town.	2	8		
6. 受動態				
• This song is liked by many people.	3	4		
Is this song liked by many people?	3	4		
Yes, it is./No, it is not.				
What are they made of?	3	4		
7. 助動詞				
• can				
I can swim.	1	10	Can I have a drink?	4
Can you swim?	1	10	Can you tell me ~?	5
Yes, I can./No, I can't.			Where can I get ~?	6
I cannot fly.	1	10		
• have to ~				
I have to study Japanese.	2	6		
Do you have to study Japanese?				
No, I do not.	2	6		
I do not have to study Japanese.				

<ul style="list-style-type: none"> • must <p>We must remember that Japan is part of Asia.</p> <p>We must not forget our neighbors.</p>	2	6		
<ul style="list-style-type: none"> • may 			<p>May I have ~?</p> <p>May I help you?</p>	<p>4</p> <p>2</p>
<ul style="list-style-type: none"> • would 			<p>I'd like ~, please.</p>	2
8. 不定詞				
<ul style="list-style-type: none"> • I went to the library to study math. 	2	5		
<ul style="list-style-type: none"> • I want to see her picture. 	2	5	<p>I want to go.</p> <p>Where do you want to go?</p> <p>What do you want to be?</p>	<p>4</p> <p>4</p> <p>5</p>
<ul style="list-style-type: none"> • I want something to read. 	2	5	<p>Do you have something hot to drink?</p>	6
9. 動名詞				
<ul style="list-style-type: none"> • I enjoy having lunch with my friends. 	2	7		

10. 命令文				
<ul style="list-style-type: none"> • Touch your nose. • Don't raise your left hand. 	2	5	Come here. Come on. Please help me. Stand up. Sit down. Please relax. Touch your ~. Open your eyes. Close your eyes. Make a circle. Throw the ~. Take two steps forward. Take one step back. Don't worry. Please call me ~. Please write soon. Turn left. Go straight. Show me your passport, please. Please tell me about ~.	1 1 1 1 1 2 2 2 2 2 2 3 3 3 3 5 5 6 6 6

1 1. 慣用表現				
Hi.	1	1	Good morning.	1
Excuse me.	1	1	Thank you.	1
Good morning.	1	1	You are welcome.	2
Nice to meet you.	1	1	Nice to meet you.	2
Thank you.	1	1	See you again.	2
How about ~?	1	3	How much ~?	2
Here you are.	1	5	Let's play together.	2
Let's ~.	1	5	Let's play ~.	2
All right.	1	5	Excuse me.	4
Come on.	1	7	Hello.	4
My goodness!	1	7	Have a nice trip!	4
Thank you very much.	1	10	Thank you very much.	4
Are you kidding?	1	10	Good afternoon.	5
Of course.	1	10	Thank you very much for ~.	5
Say hello to ~.	1	11	Dear ~.	5
What's wrong?	1	11	Over there.	6
Sure.	2	3	Up the stairs.	6
Here it comes.	2	3	In about 3 hours.	6
You're welcome.	2	3	How about ~?	6
Have a nice day.	2	3		

What's the matter?	2	1	
Good luck.	2	5	
Happy birthday.	2	5	
How much ~?	2	6	
That's great!	2	2	
Wait a minute.	2	2	
That's a good idea.	2	2	
Make yourself at home.	2	9	
What a waste!	2	3	
Not really.	3	3	
You know.	3	4	

【考案】

附属小学校で用いられている英語表現は、他の研究指定校から送付していただいた（実践）報告書に記載されている英語表現よりもやや易しい感じがするが、その主な理由としては下記のことが考えられる。

- ①外国人は盛岡在住のオーストラリア人の女性でおとなしい専業主婦と岩手大学大学院で英語教育を専攻している中国人女性（年齢は 35 歳くらい）で、兩人とも共小学生を教えた経験があまりないこと。
- ②中国人女性は英語圏に住んだことがなく、基本的定形的表現を使うことが多いこと。
- ③附属小学校では先生たちが 3 グループに分かれ、その中の 1 グループが小学校英語を直接研究しているが、他の先生方との連絡に不十分なところがあったこと。また、外国人との事前打ち合わせも不足勝ちであったこと。

一方、かなり多くの報告書の中には中学校教科書でもお目にかかれないような、短くても珍しく楽しい表現、あるいは高校生にも理解できないような慣用的な表現を使っていることもあり、指導内容の再検討の必要性があると思われる。

しかし、いずれにせよ小学生は文の構造などは意識できなくても正しい、あるいは何とか理解できそうな英語を学んでいることは確かである。このような小学生英語を無意識のうちに場面に応じて使用できるようにすれば、中学校でも高校でも、あるいは一生役立つものと期待できる。

中学校や高校の教師も小学校英語に関心を持ち、比較研究してクラスの内外で生徒が使用できるようにして欲しいものである。

VI 英語歌詞による歌唱と劇化のもたらす学習効果

～教材「パフ」による指導事例を通して～

1. 研究の目的

研究の目的は次の通りである。

英語歌詞による歌唱と劇化の実践指導によって、子どもたちの内部に、次の事柄が経験されることを検証する。

- ①英語の音声的・音楽的特徴を全体的にとらえ、それらをより印象深く長期の記憶にとどめることができる。
- ②音声的な模倣・表現への抵抗感が取り除かれ、反復学習を容易にする。
- ③日本語（翻訳）歌詞によっては達成の困難な、物語の内容の理解や登場人物の心情への共感を深め、それらを表現に結びつけることを可能にする。
- ④言語が、相互に気持ちを伝え合う大切な表現手段の一つであることを認識する。

〔研究主題と国際理解教育との関係について〕

国際理解教育の基本的コンセプトとして、異文化に対する理解がその一つとして挙げられるが、それは言い換えれば、異文化理解を通して、われわれが、地球上の多様な文化的諸相を知り、その多様な文化的価値観を受け入れることの大切さを学ぶことである。同時に、それは人間として共通の相互尊重の観念にまで至る必要があることを意味している。

従って、外国語学習は異文化理解のための重要な手段であることを認識し、初等教育の段階において、それらを単に語学修得を目的とした活動の一環として、あるいは日常会話練習の機会として学習させることにおわらせてはならない。

本研究において実践的に展開される活動は、子どもたちが、集団として、外国語による歌を楽しんで聴き、歌い、劇をつくる学習過程の中で、人の心の動きを感じ取り、反応し、また、自分自身を表現し、相手の表現を受け入れ、自己尊重と他人を尊重する心とを養い、そしてさらに、言葉が人間の意志や感情を伝える大切な手段であることに気づかせることに主眼がおかれている。それゆえ、英語に対するセンスや能力が磨かれるのは、こうした学習の成果としてであって、結果にすぎないという受け止め方を重視している。

2. 研究の方法

本研究の方法は、次の通りである。

まず最初に、本研究の取った実践のプロセスを理解するために、一般的な言語及び歌唱習得の諸段階についての見解を述べる。それに基づいて、次の学習活動の過程が導き出されるのである。

次に、英語歌詞による歌唱と劇化の指導について、本研究が用いた指導のプロセスについて説明する。

指導の段階は5つのステップに分かれており、各ステップごとに、

- ①指導の方法
- ②指導上の配慮事項
- ③学習効果に対する考察

について述べてある。

最後に、教材「パフ」を用いた指導事例を紹介し、その学習効果について考察する。

指導実践は、以下に示す複数の場所で行った。したがって、次章において報告される指導事例は、それらを総合した結果とその考察である。

[1997 (平成9) 年度]

- | | | |
|----------------------|------|------|
| ・横浜国立大学教育学部小学校教員養成課程 | 2年次生 | 160名 |
| ・同 音楽専攻 | 2年次生 | 30名 |
| ・国立音楽院 (私立専門学校) | 1年次生 | 80名 |

[1998 (平成10) 年度]

- | | | |
|----------------------|------|------|
| ・横浜国立大学教育学部小学校教員養成課程 | 2年次生 | 160名 |
| ・同 音楽専攻 | 2年次生 | 30名 |
| ・国立音楽大学音楽教育専攻 | 3年次生 | 18名 |

今回の研究では、直接小学生を対象とした実践を行うことができなかったが、本論で用いた方法は、選曲と指導の方法とを工夫することによって、小学校のいずれの学年においても実施が可能であり、しかも十分成果をあげうるものとする。

3. 結果と考察

(1) 言語及び歌唱習得の諸段階についての見解

指導事例について報告する前に、本研究の学習のプロセスとその意味を明らかにするために、一般論としての幼児における言語及び歌唱習得の諸段階について、述べておきたい。

(1-1) 聴取

想定される言語習得の最初の学習過程は「聴取」であろう。幼児が言葉を発する以前には、長期間にわたって、親や周囲の人々から幼児に対して問いかけが行われ、それによって幼児は、言語の機能とその使用法を覚えていく。従って、外国語学習においても、まずヒアリングの過程が長期にわたって先行することが望ましいと考えられる。その際、メロディーやリズムを伴った「歌」による聴取は、通常の文章の聴き取りによるよりも、さまざまな面においていっそう効果的であると考えられる。

(1-2) 模倣再現

次に、聴き取った言語を「模倣再現」する過程が現れる。幼児は、聴き取り、そして記憶した言語を、再現することに喜びを感じるようになる。そして再現は、自己の発声器官を用いた自己確認と、情報の発信とそれへの反応に対する喜びであると思われる。

幼児の歌唱の初期段階に観察される場所では、言語の概念的な意味を認識する以前の段階から、フレーズの末尾を中心に、再生可能な部分を模倣歌唱する様子が見られ、それらは言語習得の準備というよりは、むしろ言語を音声化することの面白さや、あるいは音楽によるコミュニケーション

を楽しんでいるかのようである。

(1-3) 喃語から一語文・二語文へ

第三の段階で、幼児は喃語から一語文・二語文の形で言葉を使い始める。この場合、単語は状況に応じた意味を担い、また、そのために発音とイントネーションが工夫される。

歌唱においては、全体模倣の段階に入る。単語の一つ一つの意味は把握しないのであるが、大意を感じ取り、音楽（メロディーやリズム）の面白さに引かれて、発音やイントネーション、それにアゴーギクまでも体得してしまう。

ここにおいて、言語活動が主に意味の伝達という慣用的機能 *conventional function* に傾くものに対して、歌唱においては広い意味での感情の伝達という象徴的機能 *symbolic function* に傾いていくものと考えられる。

(1-4) 簡単な文章の使用

言語習得の第四の段階では、会話の中で簡単な文章を使い始め、そしてその中に、話者の意志や感情を込めて表現するようになる。

歌唱においては、歌詞の意味を理解して表現を工夫して歌う段階に入る。フレージングを意識し、音声にも表情が込められる。いわゆる歌唱という形態を通したメッセージとなるのである。

(1-5) 文章を作る

最終の第五段階は、通常の言語学習では、文章の読解や、意味の通る文章を話したり書いたりする学習となる。

小論の学習では、歌詞の内容から想像力を働かせてドラマを作り、それを演じる中で、言語の機能と使用法とを体得する活動となる。

さて、これらのいずれの段階においても、外国語歌詞による歌唱と劇化による学習は、日本語や外国語などの通常の言語学習に比べても、言語の機能と使用法とを体得するうえで、学習者に著しい効果をもたらすことが観察されるのである。

以下、その活動の方法を紹介しながら、それぞれの段階においてあげ得た学習効果について考察していく。

(2) 英語歌詞による歌唱と劇化の指導の過程について

本論の取る学習活動の過程は、1の「言語及び歌唱習得の諸段階についての見解」において述べた5つの段階に関係し、やはり5つの段階に分けられている。しかし、対応は厳密なものではなく、また、実際の展開においては、これらの段階の順序性は必ずしも守られることはなく、まとめられたり途中が省略されたりすることはいくらかでもある。つねに対象となる学習者の状況に合わせて臨機応変に弾力的に行われる。

基本的なプログラムとそれに対する考察は次のようになる。

【ステップ1】音楽（英語による歌）を聴く

(2-1) 指導の方法と配慮事項

学習の最初の段階は、英語歌詞による歌を聴取する活動である。

これには3通りの方法がある。

- ①CDやテープを用いて、子どもたちに特に集中させることをしないで、雰囲気づくりの中で自然に耳に達するように聴かせる方法
- ②CDやテープを用いて、子どもたちに集中させて聴かせる方法
- ③指導者が自ら演奏して聴かせる方法

時間に余裕がある場合には、三つを併用するのが最も効果があるが、条件的に無理な場合には、このうちの一つでも二つでもよく、できるだけ強要しない形で、時間をかけ回数を重ねることが効果を上げる。

選曲の際に配慮すべき事項として、次の点が挙げられる。

- ①歌詞ならびに音楽が、児童の発達段階に即した興味・関心を引く内容であること
- ②児童に親しみやすい音楽であること

できれば、日本語などによって、すでにその歌のメロディーなどを記憶している場合には、聴取とその記憶がいっそう容易になる。

- ③その後の活動の展開に結びつけやすい教材であること

また、活動のねらいはあくまで「子どもたちが音楽（歌）に親しむこと」にあるので、開放的な雰囲気の中で自由に聞かせるのが好ましい。子どもは気付かぬ間に、英語の音楽的なリズムやメロディーとともに、発音やイントネーションに親しみ、それらを記憶する。従って、自然に口ずさむ者がいればそれでよいし、ひとりで歌いたくなるような雰囲気づくりが大切である。

【ステップ2】音楽を聴きながら歌う

(2-2-1) 日本語歌詞による歌唱と配慮事項

英語歌詞での歌唱による再現の前に、聴取した歌に、日本語による訳詞がある場合には、それによる歌唱が効果をもたらす。歌の、特にメロディーにいっそう親しみを感じ、全体の内容が把握でき、英語による歌唱への抵抗感を取り除いてくれるからである。

その際に指導者が心得ておかななくてはならないことは、

- ①日本語による歌唱は、次の英語による歌唱のための参考であること
- ②邦訳による歌唱と英語によるそれとでは、メロディーラインやリズムに相違があること
ときには、原詞とはまるで違った作詞が施されている場合があること
- ③意味上の情報量に大きな差があること

などである。

その点、できるだけ原曲（英語の演奏）に近い、訳詞や楽譜による教材が手に入れられれば、それにこしたことはない。

しかしながら、指導に当たってはあまり細かな点を気にせず、むしろ子どもたちが歌に親しみ、学習への意欲を高めることに主眼をおく。子どもたちが日本語歌詞によって少しでも大意を汲み取り理解を深めることは、この後の学習を容易にする。

(2-2-2) 英語歌詞による歌唱と配慮事項

この段階における歌唱のねらいは、もっぱら模倣にある。詞章の意味するところを除いて、発音やイントネーションなど、その言語の音声的・音楽的な特徴を、全体的に丸ごと、把握できただけ、あるいは把握したままを再現することに主眼をおく。

CDまたはテープによる音楽に合わせたり、できれば指導者の歌と伴奏に合わせて歌わせたりする。後者においていっそう効果があることは言うまでもない。

指導に当たっては、あくまで模倣によって、歌や言葉の感じをつかむことにねらいを置き、意味の

把握や音声面での正確さを求めないこと。英語の発音やリズムに親しみ、慣れることが目的なので、うまくできなくとも叱ったり、矯正をしないほうがよい。指導者は教えるという態度を前面に出すことを控え、いっしょに楽しむ雰囲気をつくりだすことが有効である。

【ステップ3】英語の音声面を確認する

(2-3) 英語歌詞を読む

歌唱に慣れるにしたがって、学習者はより正確な発音を求めるようになる。そこで指導者は、歌のメロディーラインを離れて、英語歌詞を読み聴かせ、学習者に模倣させる。ここにおいて、それまで重ねてきた聴取のプロセスが生きてくる。

朗読の最初は、歌唱時のリズムから離れることもあるが、次第に、歌のリズムに近づけていく。すなわち、等拍を刻みながら、歌のリズムに合わせて朗読させ、次いで低めの音程によって、徐々に歌のメロディーに近づけながら朗読する。

ここでもあまり発音の正確さにこだわらないようにしたい。発音面は慣れる程度とし、むしろ、日本語と異なる、英語の強弱、イントネーション、フレーズやアゴーギク、リズムに対する感覚を体得させることのほうが大切である。

【ステップ4】英語歌詞の意味を汲み取って歌唱する

(2-4) 指導の方法と配慮事項

発音に慣れるにしたがって、メロディーに合わせて歌うほうが容易になり、朗読を離れる段階がやってくる。そして、学習者の内に、心を込めて歌うために、歌詞の意味を知りたいという要求が高まる。そこで指導者は、一つ一つの言葉の意味を説明し、歌詞の大意を知らせるように努める。

この段階は、指導者にとっても重要な意味をもつ。それは、日本語歌詞による歌唱だけでは到底理解しえなかった、その歌のもつ深い意味や背景について理解することになるからである。

学習者はこの段階を通過してはじめて、歌は模倣の段階から表現の段階へと移行する。

英語歌詞による歌唱がここで可能となるのである。

歌詞の説明で配慮を必要とする事項は次のようである。

- ①指導者は、歌詞（詩）においては、語順が、通常の文章と多くの個所で異なる点に注意すること
- ②活動の主眼が、言葉の意味や文法的理解よりも、把握した意味が音楽表現に生かされることをあつことを念頭に置いて、学習者の歌詞に対するイメージが膨らむように指導すること
- ③行間に込められた意味についても、学習者が各自想像力を働かせて汲み取っていけるように、解釈をあまり限定することなく進めること
- ④音楽的完成度や語学的な正確さにこだわらずに、活動の目的を審美的鑑賞というよりは、コミュニケーションの手段としての言語の意味の獲得に置く方向で指導すること

【ステップ5】英語による歌を劇化する

(2-5) 指導の方法と配慮事項

劇化の手順は次のようである。

- ①小グループを編成し、グループ毎に主題とする歌を決めさせる
- ②歌の節と節との間に、創作によるドラマを挿入するように脚本を相談させる

- ③セリフだけでなく、楽器による音楽や擬音効果を挿入してもよいこととする
 - ④舞台を想定させ、人形を登場させたり、背景を作るなどの工夫をさせる
 - ⑤前後や途中で主題の歌を歌ったり、また聴衆に歌わせるなど、歌が中心となるように工夫させる
 - ⑥練習し、発表し合っ、演じたり、見物する側に回ったりして歌と劇を楽しむ
- 低学年や少人数の学級では、主題を一つにして、全員で脚色を相談していくとか、場面毎にグループを割り当てて相談させる方法なども考えられる。
- 可能であれば、会話部分を英語で語らせることはいっそう有効である。

(3) 教材「パフ」による指導事例とその学習効果についての考察

実践した教材については、ここに例として挙げる「パフ」のほかに、「赤鼻のトナカイ」「クレメンタイン」の例が行われたが、いずれの場合も指導のプロセスはほぼ同様であり、また学習効果についても同様の結果が得られたので、ここでは「パフ」の場合のみを取り上げて報告しておく。

【ステップ1】英語による歌を聴く

(3-1-1) 実践の結果

活動を始める前や授業の途中で、BGM的に、CDによる「パフ」を聞かせた。

演奏はPeter, Paul and Mary によるライブ録音のものを聞いた。基本的なメロディーラインが、後に用いる楽譜とほぼ一致していたことが、後の活動を容易にした。

ところどころで行われるアドリブ演奏は、逆に、実際の歌が、楽譜によらず、臨機応変に変化するものであり、それが歌の生命であることを教えるのに役だった。

リズムが易しく、メロディーも親しみやすいので、記憶しやすい。また、リフレインがあることも記憶を助け、Verseに進む余裕を与えてくれた。

今回の実践は、対象が大学生のこともあって、2～3回の聴取によって、次のステップへ進むことを可能にした。

【考案】(3-1-2)

この音楽を通した聴取活動を、通常の英語による会話または文章の聴取活動と比較した場合に言えることは、音楽を通した聴取によるほうがはるかに印象が強く、長期の記憶に残りやすいのではないかと、という点である。

その理由として挙げられるのは、

- ①リズム、メロディー、ハーモニーなど、音楽を構成している諸要素の作りだす雰囲気、児童の想像力を喚起し、注意を引きつける
- ②規則的な拍や旋律の反復など、構造や形式が安定していて、記憶しやすい
- ③抑揚や強弱など、言語のもつ諸要素が拡大・強調された形で提示されるため、分かりやすい
- ④言語の意味の概念的把握が困難な児童にあっても、音楽によって、情動を伴った感性的把握が容易となる

などで、これらの理由によって、歌唱活動は、言語活動に障害をもつ児童に対しても、音楽療法などで大きな成果を挙げているのである。

【ステップ2】音楽を聴きながら歌う

(3-2-1) 実践の結果

小学校4年生の音楽教科書に、次のような日本語歌詞による楽譜（中山知子 作詞）が載っていたのでそれを用いた。《楽譜1》

学生たちは、2～3回復唱する間に歌えるようになった。

《楽譜1》

パフ

中山知子作詞 サアトシ作曲



1 ふ し ぎ な バ フ か い じ ゅ う だ さ
 2 だ れ も し ら な い は な れ じ ま だ
 3 き ょ う は な に し て あ そ ぼ う か そ
 4 あ ら な み だ っ て へ い ち ゃ ら だ ら し
 5 こ め ん ね バ フ さ ー よ な ら バ

れ い な う み か ら ま い あ さ お は よ (ラン ラン ラン)
 け ども ふ かり は まい あ さ お は よ (ラン ラン ラン)
 だ さまのせ な かに のっ けて お く れ
 ぶ き あ げ な が ら お よ い で い く
 フ は た だ ひ と り な み だ ポ ロ ロン

な か よ し ジ ャ ン キ ー し ま の ち び っ こ す
 かい じ ゅ と ジ ャ ン キ ー す な は ま で す ゆ
 なる ほど ジ ャ ン キ ー お も し ろ い た お
 の う ち ジ ャ ン キ ー に じ を み た う み
 な か よ し ジ ャ ン キ ー わ か れ て も わ

ぐ に か け て き て ヤ ア セ ア お は と
 かい に か くれ ん ぼ ま ける も の か
 お き な ふ ね だ よ ジ ャ ン キ ー は せん ち ゅ び ん
 の む じ の ま ち へ い き た く な っ た の
 す れ な い て よ ね バ フ の こ と を

【考案】(3-2-2)

この楽譜は、メロディーラインもほぼ英語演奏に近く、歌詞もかなり忠実に内容を伝えているので、日本語歌詞だけで歌ってもそれなりに楽しさはあった。しかし、以下に述べるように、英語歌詞に比べると、多くの点で情報が少なく、補足説明されなければ理解が困難で、音楽的表現にも結びつけにくいことが分かった。つまり、日本語歌詞によるだけでは、どうしても表現が浅い水準にとどまり、この歌のもつ深遠な喜びにはほど遠いことを感じた。

いくつかを列挙する。

- ①パフと少年ジャッキーに関する情報が不足しているため、性格や二人の関係が不明瞭となり、リアリティーに欠ける。
- ②二人が「帆にいっぱい風をはらんだ船にのって」旅行に出かけたこと、途中で「いろんな国の王様や王子が挨拶してくれたり、海賊たちが船の旗を降ろしてしまった」くだりなど、胸踊る冒険の様子が伝わってこない。
- ③日本語による「そのうちジャッキー虹を見た 海のむこうの町へ行きたくなった」のところは、この歌の生命であり、想像力のいるところである。
英語歌詞によれば、「パフは（魔法の竜だから）いつまでも生きられますが、小さな子どもたちはそういうわけにはいきません」と書かれている。その理由について考えさせるのが授業の楽しみの一つであるが、日本語によるだけでは想像が難しい。
- ④友人ジャッキーと別れた後のパフの悲しみについて、日本語ではただ「ひとり涙ぼろろん」と書かれているが、英語ではたいへんな内容を述べ、強調されている。であればこそ、それまでの物語がいっそう意味をもち、実在感を帯びてくる。

このように、日本語歌詞によるだけでは、この歌が与えてくれる多くの大事なものを得ることがきわめて難しいことが分かったが、それでもなお、日本の子どもたちにとって、日本語歌詞で接することができるのは、いろんな意味で助けとはなると考える。

(3-2-3) 英語歌詞によって歌う

これまで用いてきた、Peter, Paul and Mary による演奏をCDで聴かせながらいっしょに口ずさませた。筆者の歌とピアノ伴奏でいっしょにうたわせたこともあった。

学生たちはすでに耳に慣れ親しんでいるため、2~3回繰り返す間にだいたいの音を真似して歌うことができた。ただし、英語歌詞を見ながらでないと歌えない場合が多かった。

参考までに、次ページに英語歌詞による楽譜の例を掲げる。《楽譜2》

【考案】(3-2-4)

この場合も、英語の文を繰り返し朗読する活動と違って、音楽的なさまざまな要素が、活動を楽しいものにしてくれている。また、ステップ1の考察(3-1-2)(8ページ)と同じ理由によって、短期間での記憶を可能にし、かつその記憶が長期にわたることを経験できた。学生たちは、1週間後も十分に記憶を再生することができた。

【ステップ3】英語の音声面を確認する

(3-3-1) 実践の結果

英語歌唱に少し慣れた頃合を見計らって、英語歌詞の発音・抑揚・リズム等の確認活動に入った。いったんは歌唱時のそれらから離れて聴取・模倣を繰り返し、その後次第に歌唱時のそれらに近づけていった。

この場面では、指導者は英語発音に自信がなかったのが苦労した。できればネイティブによるアシスタントに協力してほしいところである。

PUFF

《楽譜2》

Words & Music by Peter Yarrow and Leonard Lipton

With a Hit (In 2)

Puff, the mag - ic drag - on lived by the sea And
 frolicked in the sea-tuna mist in a land called Ho-nah-Lee.

Lit - tle Jack - ie Pa - per loved that ras - cal Puff And
 brought him strings and seal - ing wax and oth - er lan - cy stuff. Oh!

Refrain
 Puff, the mag - ic drag - on lived by the sea And
 frolicked in the sea-tuna mist in a land called Ho-na - Lee.

Puff, the mag - ic drag - on lived by the sea And
 frolicked in the sea-tuna mist in a land called Ho-nah - Lee.

Verse
 geth - er they would trav - el on a boat with bit - leaved sail.
 drag - on lives for - ev - er but not so lit - tle boys
 Jack - ie kept a look - out perched on Puff's gi - gun - tic
 Paint - ed wings and gi - ant rings make way for oth - er
 tall. No - ble kings and prin - ces would
 toys. One grey night it hap - pened, Jack - ie
 how when - e'er they came, Pi - rate ships would
 Pa - per came no more And Puff that night D.S. al
 low's their flag when Puff reared out his name. Oh!
 drag - on he ceased his fear - less roar. Oh!
 land called Ho - nah - Lee.

1. His head was bent in sorrow, green scales fell like rain,
 Puff no longer went to play along the cherry lane,
 Without his lifelong friend Puff could not be brave,
 So Puff that mighty dragon sadly slipped into his cave. Oh!

【考案】(3-3-2)

この活動は、日本における英語学習の弱点を補うことができる点で意味がある。通常、英文を朗読するのみでは、英文独特のリズムやイントネーションをとらえ表現することはなかなかできるようにならない。その点、歌をベースとしている歌詞によれば、歌唱におけるリズムやイントネーションを思い浮かべながら朗読するので、きわめて音楽的な朗読となる。また、この作業が、次に「英語の歌を歌えるようになる」という楽しみを与えてくれるために、学習者を十分に動機付けてくれる。

【ステップ4】英語歌詞の意味を汲み取って歌唱する

(3-4-1) 実践の結果

英語による音楽的な朗読に慣れたところで、歌詞の意味内容を理解させるために、語句と大意の説明を行った。音声はすでに学習者の耳に入っているので比較的容易に進めることができた。

教材「パフ」のもっている詩の豊かさが、この活動を助けてくれた。また、物語性を備えていることも、学習者の関心を引き込む要因となっていた。最後のパフの悲しみの場面では、多くの者の共感を得て、感情移入による表現を容易にしてくれた。

意味を理解して歌うことで、歌う楽しさが増し、表現を工夫するようになった。

【考案】(3-4-2)

英語歌詞による歌の表現に変化が現れたのは当然のこととしても、同様の変化が日本語歌詞で歌う場合にも生じることを発見したことは大きい。【ステップ2】で、特に日本語歌詞で歌っているときには、1節から5節までがほとんど変化のない表情で歌われていたのである。このことは、つまり、日本語の歌詞によるだけでは、この歌のもつ意味やストーリーの展開がほとんどとらえられないままに演奏されていたことを意味する。日本の多くの子どもたちが、学校音楽に魅力を失い、やがて離れていってしまう原因の一端を見る思いがした。英語の原詩・原曲によるこの学習では、その点の欠陥を補完できるのである。

【ステップ5】英語による歌を交えてドラマを創る

(3-5-1) 実践の結果

いよいよ最終段階にきた。クラスを10人前後のグループに分け、相談しながら活動を進めさせた。課題は、リフレインを利用しながら、その間のドラマをつくり、発表することとした。複数の教材(歌)を同時進行させた場合もあったので、クラスの中にはほかのドラマ(「赤鼻のトナカイ」「クレメンタイン」など)に取り組むグループもあった。

活動の手順は、前章の【ステップ5】(2-5)(7ページ)に示した通りである。

会話部分を英語でしゃべらせることは、指導に自信がなくてできなかった。反省としては、やってみてもよかったかな、とは思っている。

発表は、パフォーマンスや小道具(背景の絵や役柄を表わすお面)も登場して、にぎやかであった。ナレーションやドラマの会話部分に工夫がみられ、音声にも表情が豊かに現れていた。場面の雰囲気合った音楽をつくり、背景に流しているグループもあった。

1グループの発表時間は、平均して10分前後であった。

【考案】(3-5-2)

【ステップ4】までの活動だけでは、子どもたちが一方通行的な学習に押し込められる危険に陥り

やすい。そして、従来の音楽の学習では、この段階にとどまる活動が多かった。英語も歌も、教えられ、覚えるだけで、要するに理解するだけで、課題は自分たちの前を通り過ぎていったのである。

本研究のねらいは、このような、歌やドラマをつくる活動を通して、国際理解教育にも通じる、人の心の動きを感じ取り、反応し、自己を表現し、相手の表現を受け入れ、自己尊重と他人を尊重する心とを養い、さらに、言葉が人間の意志や感情を伝える重要な手段であることに気づくことにある。したがって、この【ステップ5】の活動はぜひ必要であり、教育上大きな意味をもっている。

発表の内容や仕方はさまざまであった。しかし、全員が参加している様子が見られた。それでよいし、それがよいのである。同じ教材を学習しても、受けとめ方、感じ方は人それぞれであり、むしろ、その違いを認め合い、肯定し合うことが重要である。既成の脚本によっては、そここのところの学習が難しいと感じている。

発表時には、演じる者も、見る者も、ハラハラ、ドキドキの連続であった。そのうえ健全なユーモアが生じる。通常の学習では、このような集中や盛り上がりはなかなか望めない部分である。

4. 今後の課題

英語歌詞による「パフ」の歌唱と劇化の学習によって、学習者に次の事柄が経験されることが観察された。

(1) 英語の音声的・音楽的特徴を全体的にとらえ、それらをより深く長期の記憶にとどめることができる。

英語による文章の長期の記憶は、一般にはどんなレベルにあっても困難である。会話文も、丸暗記したとしても、シチュエーションに応じた取り出しが難しい場合が多い。その点、音楽（歌）を通じた記憶は、いったん記憶されてしまえば長期間保持することが可能である。

今回、この部分だけを取り出した実験は行っていないので推測も含まれているが、少なくともリフレインの箇所は多くの学生が暗譜で歌うことができていた。

これを可能にする理由として考えられるのは、次の事柄である。(再掲)

- ①リズム、メロディー、ハーモニーなど、音楽を構成している諸要素のつくりだす雰囲気が、児童の想像力を喚起し、注意を引きつける
- ②規則的な拍や旋律の反復など、構造や形式が安定していて、記憶しやすい
- ③抑揚や強弱など、言語のもつ諸要素が拡大・強調された形で提示されるため、分かりやすい
- ④言語の意味の概念的把握が困難な児童にあっても、音楽によって、感動を伴った感性的把握が容易となる

この感動を伴うことが、長期の記憶には必要な条件と思われる。

(2) 英語の音声的な模倣・表現への抵抗感が取り除かれ、反復学習を容易にする。

英語に特有の音声的な側面、つまり、発音やイントネーション、アクセントなどに子どもたちが慣れていないため、例えば普通の文章を模倣させたとしても、心理的抵抗が大きく、また、意味を分からない不安感から、大きな声を出しにくい。

その点、音楽があることによって、音楽的要素が緩衝の役割を果たし、子どもたちも安心して音声に載せることができる。(1)での理由と同じに、構造や形式が安定していることも大きな要素と思われる。

音楽では、反復学習がきわめて容易である。

(3) 日本語（翻訳）歌詞によっては達成の困難な、物語の内容の理解や登場人物の心情への共感を深め、それらを表現に結びつけることを可能にする。

翻訳によっては、情報の量が3分の1ほどに減ってしまい、原詩が伝えようとする内容が十分に把握されない。英語歌詞による学習によって、そのあたりの不足が補われ、日本語歌詞による表現にもよい影響を与えることができる。

詩の内容を深く理解することによって、音声や音楽的な表現のうえに豊かな表情を加味することができるようになる。

(4) 言語が、相互に気持ちを伝え合う大切な表現手段の一つであることを認識する。

歌詞の内容を敷衍したり、行間や節間を想像力を駆使して埋めるドラマをつくる活動は、子どもたちの間にさまざまなよい効果をもたらす。

活動の中で、子どもたちは、登場人物や物語の内容に共感し、自己を表現することや相互にコミュニケーションすることを学び、社会性を身に付け、自己尊重の気持ちをもつ。

ドラマの中で、相互の会話を考える活動では、言葉が人に気持ちを伝える手段であることを学ぶ。それを英語で行うならば、いっそうそのことに気づき、言葉をもつことの意味と楽しさを実感するであろう。

本研究における実践活動においては、これらの事柄が総合的に、楽しく動機づけられる中で展開され、学習される。音楽における表現の基本と、外国語を学ぶうえに重要ないくつかの基本的事項とが、きわめて自然なかたちで養われることに確信を得た。

今後の課題としては、さらにレパートリーを広げ、何よりも、実際に小学生を対象に長期にわたる活動を行い、この学習の効果を確かめてみなくてはならない。また、今回考察として掲げたいくつかの項目についても、推測の域を脱して検証してみなくてはならない。

今後とも、共鳴する多くの方々とも共同で実践研究を積み重ね、結論を出していかななくてはならない。同様の実践についても調査し、その指導者と意見を交わす必要がある。

また、本研究の他の共同研究者らの成果をも取り入れ、研究に生かしていきたい。

Ⅶ 小学校英語教育における「歌」教材の可能性

小学校英語教育において、歌・音楽を通じた指導が、子どもたちを英語に近づけ親しませる有効な手段であることが知られている。これまでの英語教育研究開発校においても多くの歌が用いられてきており、それらの数は総数で230曲を超える。

それらの中から、研究開発校4校以上の学校において取り上げられた51曲について、教材名、使用場面（使用目的）、音楽科教材との関連等について調査・考察を行い、今後の指導の参考に供することとする。

1. 調査の概要

- (1) 小学校英語教育研究開発校において、指導に用いられた英語による「歌」のタイトル数は231曲にのぼった。
- (2) 231曲のうち、4校以上の学校において使用されている曲の数は、51曲であった。
それらを児童の発達段階を考慮して、低中高学年別に分けてみた。
- (3) 上位51曲の使用場面・使用目的は、大きく次の4つに分類された。
 - ①挨拶・特別の日の歌（8曲）
 - ②名詞・数詞など身の回りの事柄に結びつけて、音声に慣れさせ意味を理解させるための歌（17曲）
 - ③聴いたり、合わせて歌ったりすることを通して、英語の音声やリズムに親しませるための歌（18曲）
 - ④動作やゲームを伴い、雰囲気を楽しみながら英語に親しませるための歌（8曲）
- (4) 51曲のうち17曲が現行の小学校音楽教科書（4社）の中に取り上げられており、メロディーに対する親しみやすさが選択の大きな条件となっていることがうかがわれた。
- (5) その他、行事との関連やマスメディアを通して子どもたちに親しまれている歌が選択の理由となっていることがうかがわれた。

2. 多くの学校が選択した歌

研究開発校4校以上で取り上げられた歌（51曲）の教材名を、児童の発達段階を考慮して、低学年・中学年・高学年別に分けて示すと次のようになる。もちろん、これらは一応の目安であり、便宜的に分けてみたに過ぎないので、目的と使用方法のいかんによっては、どの学年において使用しても構わないし、学年をまたがって用いられることも当然あり得るのである。

なお、判断のつきかねたものについては最後のところにまとめておいた。

() 内の数字は、取り上げた学校数を示す。多い順に記載してある。

【低学年】

- We Wish You A Merry Christmas (30)
- London Bridge (22)
- Ten Little Indians (22)
- Twinkle, Twinkle, Little Star (22)
- Bingo (17)

The Alphabet Song (15)
Under The Spreading Chestnut Tree (12)
 (The) ABC Song (11)
Good Morning To You (8)
Happy Birthday To You (8)
The Farmer In The Dell (8)
Hello! (7)
Five Little Monkeys (5)
Jingle Bells (5)
The Finger Family (5)
Hi, How Are You? (4)

【中学年】

Head, Shoulders, Knees And Toes (35)
Hokey-Pokey (15)
Seven Steps (15)
Old Macdonald Had A Farm (12)
 (The) Hello Song (11)
Edelweiss (10)
Do-Re-Mi (9)
It's A Small World (8)
Mary Had A Little Lamb (8)
What's This (8)
Sunday, Monday, Tuesday (7)
Days of The Week (6)
The Family Song (6)
How Do You Do? (4)
One Little Finger (4)
Puff (4)

【高学年】

Are You Sleeping? (9)
Sing (8)
Colors (7)
Row, Row, Row Your Boat (7)
Twelve Months (Of The Year) (7)
You Are My Sunshine (7)
Silent Night (6)
My Bonnie (5)
This Is The Way (5)
Did You Ever See A Lassie? (4)
Open, Shut Them (4)

【学年の判断のつきかねた教材】

If You're Happy And You Know It Clap Your Hands (15)
Good Morning (8)
Animals Song (6)
Good-bye Song (6)

- Christmas Song (5)
- Fruit Song (5)
- Santa Claus Is Coming To Town (4)
- Teddy Bear (4)

3. 使用場面・使用目的別分類による教材名

研究開発校において、4校以上の学校が取り上げた51曲について、使用場面・使用目的を分類した結果、大きく次の4つに分類することができた。

- (1) 挨拶・特別の日の歌 (8曲)
- (2) 名詞・数詞など身の回りの事柄に結びつけて、音声に慣れさせ意味を理解させるための歌 (17曲)
- (3) 聴いたり、合わせて歌ったりすることを通して、英語の音声やリズムに親しませるための歌 (18曲)
- (4) 動作やゲームを伴い、雰囲気を楽しみながら英語に親しませるための歌 (8曲)

以下、それぞれの曲名の紹介及び考察を行うことにする。曲名の右側の()内の数字は、取り上げた学校の数を示す。

- (1) 挨拶・特別の日の歌
 - Hello Song (11)
 - Good Morning (8)
 - Good Morning To You (8)
 - Happy Birthday To You (8)
 - Hello! (7)
 - Good-bye (6)
 - Hi! How Are You? (4)
 - How Do You Do? (4)

【考察】

これらの歌は、たいていどの学校でも用いられていると思われる。

授業の始まりにあたって、緊張した雰囲気を和らげ、コミュニケーションを円滑にしてくれる作用をもつ。また、日本語による思考の世界から英語による思考の世界へと誘う儀式的な意味も備えている。簡単な旋律の歌を通して英語の感覚に慣れさせ、学習集団としての人間関係を築く導き手の役割を果たしてくれる。

言語だけによる方法よりも、授業の流れを作りやすく、また、繰り返される一定の形式の中で行われるので、学習者に安心感を与えることができる。

全学年で使用されるが、特に低学年の導入段階において用いられるケースが多い。

- (2) 名詞・数詞など身の回りの事柄に結びつけて、音声に慣れさせ意味を理解させるための歌
 - Head, Shoulders, Knees And Toes (35)
 - Ten Little Indians (22)
 - Bingo (17)
 - The Alphabet Song (15)
 - (The) Hokey-Pokey (15)

Seven Steps (15)
ABC Song (11)
What's This? (8)
Colors (7)
Sunday, Monday, Tuesday (7)
Twelve Month (Of The Year) (7)
Animals Song (6)
Days Of The Week (6)
The Family Song (5)
Fruit Song (5)
This Is The Way (5)
One Little Finger (4)

【考察】

小学校英語教育では、単語の綴りよりも音声面からのアプローチが重視される。音声を通してながら、身の回りのものの意味の理解につなげていくのである。歌を通して学ぶことによって、英語独白の発音やイントネーションに慣れていく。これらの歌には動作を伴ったものも多い。

“The ABC Song” “Bingo” などはアルファベットを学習する。“Ten Little Indians” “Seven Steps” などは数を、“Colors” は色を、“Twelve Months” “Days Of The Week” “Sunday, Monday, Tuesday” は月、週、曜日を、“Head, Shoulders, Knees And Toes” “Hokey-Pokey” などは身体部位を、“The Family Song” は家族の名前を、“What's This?” “This Is The Way” “One Little Finger” などは日常生活や身の回りの物の名前などについてそれぞれ学習する。

学年別では、中学年で用いられる教材が多かった。

(3) 聴いたり、合わせて歌ったりすることを通して、英語の音声やリズムに親しませるため

We Wish You A Merry Christmas (30)
Twinkle, Twinkle, Little Star (22)
Old Macdonald Had A Farm (12)
Edelweiss (10)
Are You Sleeping? (9)
Do-Re-Mi (9)
It's A Small World (8)
Mary Had A Little Lamb (8)
Sing (8)
The Farmer In The Dell (8)
You Are My Sunshine (7)
Silent Night (6)
Christmas Song (5)
Jingle Bells (5)
My Bonnie (5)
Did You Ever See A Lassie? (4)
Puff (4)
Santa Claus Is Coming To Town (4)

【考察】

これらの歌は、子どもたちがすでに、少なくともメロディーには慣れ親しんでいるものばかりである。日本語歌詞によって学習しているものもある。従って、聴かせたり、聴きながら合わせて歌わせたりすることにも抵抗が少なく、導入や雰囲気づくりに有効である。繰り返すことによって、英語のもつさまざまな要素に慣れさせることができ、また、心情的な共感を伴った聴取は、子どもたちの長期の記憶に残りやすいのである。

これらの中で“Twinkle, Twinkle, Little Star”は最もポピュラーで、ほとんどの教室で用いられるといってもよい。“Old Macdonald Had A Farm”は「ゆかいなまきば」、

“Mary Had A Little Lamb”は「メリーさんのひつじ」として日本語歌詞でも親しまれており、子どもたちも英語を楽しみながら歌うことができる。“Edelweiss” “Do-Re-Mi”はともにミュージカル映画でお馴染みの曲である。“It’s A Small World”も旋律はみなよく知っている。“Did You Ever See A Lassie?”は「かわいいオーガスティン」の題で知られている。そのほかではクリスマスにちなんだ歌が多く用いられている。

子どもたちがやがてこれらの歌の英語による歌詞の意味が理解できるようになったとき、その感動は一段と大きいものになるだろう。

使用は全学年に及んでいるが、比較的中・高学年で多く取り上げられている。

(4) 動作やゲームを伴い、雰囲気を楽しみながら英語に親しませるための歌

London Bridge (22)

If You’re Happy And You Know It Clap Your Hands (15)

Under The Spreading Chestnut Tree (12)

Row, Row, Row Your Boat (7)

Five Little Monkeys (5)

The Finger Family (5)

Open, Shut Them (4)

Teddy Bear (4)

【考察】

これまでの歌の中にも、動作やさまざまなゲームと結びつけて紹介されているものが多くあった。こうした動きやゲームを伴うことによって、場の雰囲気を盛り上げ、表現への抵抗感を取り除き、まさに楽しみながら英語に親しませることができる。からだの動きを通して学ぶことによって、表現力やリズム感が豊かになり、記憶にも止まりやすい。おたがいの個性にも触れることができ、人間関係がより深められるのである。

“London Bridge”は「ロンドン橋落ちた」の歌詞で古くから親しまれている。二人が向かい合って手を高く合わせてトンネルを作り、その下を通り抜けながら遊ぶ。

“Under The Spreading Chestnut Tree”もよく知られている「大きなくりの木の下で」で、動作をつけながら歌われる。“Row, Row, Row Your Boat”はボートをこぐ動作をしながら歌う。

“Five Little Monkeys”のメロディーは「きらきら星」の前半と同じで、小猿とそのお母さんのユーモラスなやりとりが、動作とともに歌われる。指先に小猿の顔を付けた軍手を用意して遊ぶのも楽しい。“The Finger Family”は、指を家族に見立てて指遊びをしながら歌われる。

“Open, Shut Them”は両手をむすんだりひらいたり、歌詞に合わせていろいろな動作をしながら歌う。

学年別では、低学年で用いられるものが多かった。

4. 小学校音楽科教材との関連

現在、小学校の音楽教科書は3社から出版されている。3社の教科書中、小学校英語指導と関連が深いと思われる教材名を列举した。

これらの曲は、子どもたちにはいっそう馴染みが深く、英語で聴いたり歌ったりする場合も、興味をもたせやすく、導入が容易な教材といえる。

表中（ ）内の数字は、英語指導で取り上げている学校数。右欄のアルファベットと数字は、発行会社名と掲載されている学年を示す。(例えば、A1 は、A社第1学年の教科書を意味する)ただし、器楽教材として扱われているため、歌詞が付いてない場合もある。

英語教材名	日本語曲名	発行会社・学年
【低学年】 Twinkle, Twinkle, Little Star (22) Under The Spreading Chestnut Tree (12) Jingle Bells (5)	きらきら星 大きなくりの木の下で ジングルベル	A1, B1, C1 A1 C2
【中学年】 Old Macdonald Had A Farm (12) Edelweiss (10) Do-Re-Mi (9) Mary Had A Little Lamb (8) Puff (4) When The Saints Go Marchin' In (2) Aura Lee	ゆかいなまきば エーデルワイス ドレミの歌 みんなの地球 メリーさんのひつじ パフ 聖者の行進 オーラリー	A5, B3, C3 A4, B6, C4 A3, B3, C3 A6, B4, C3 B4 A4, B3 B4, C3, C6 A6, B4
【高学年】 Are You Sleeping? (9) My Bonnie (5) Donna Donna (4) Michael, Row The Boat Ashore (4) Ob-Ra-Di, Ob-Ra-Da (4) Where Have All The Flowers Gone	かねが鳴る わたしのポニー ドナドナ こげよマイケル オブラディ・オブラダ 野に咲く花のように	A5 B6 C6 A6, C5 A6 C6

【考察】

“Twinkle, Twinkle, Little Star” は、どの教科書でも取り上げられており、

“The Alphabet Song” とメロディーが同じで、多くの学校で導入段階で用いられている。

“Springtime” は、51曲中にはなかったが、“かっこう” として馴染みの深いメロディーである。

“Under The Spreading Chestnut Tree” は、教科書では1社であるが、幼稚園、保育園などではかならず扱われている歌であろう。

“Old Macdonald Had A Farm” は、3社とも3学年の教科書に掲載しており、メロディーはよく知ら

れている。歌詞を替えたり、動物の鳴き声を工夫したりして楽しむことができる。

“We Were All At Patty’s Party” も同じメロディーの歌である。

“Puff”は、子どもたちの好きな歌であるが、英語歌詞によればさらに深い物語の意味に触れられ、リアリティに富んだ表現に導くことができる。紙芝居などに仕立てても使える。PPM(Peter, Paul&Mary)による後年の演奏は圧巻である。

“Edelweiss”も英語歌詞によって、さらに深いリアリティに富んだ表現が可能となる。映画場面の鑑賞も加味するとさらに親しみやすくなるであろう。

“It’s A Small World”は、訳詞はそれぞれ異なるが3社ともに取り上げているので、動機付けは十分で扱いやすい。

“Are You Sleeping?”は Where’s Mr. Thumb”の歌詞で指あそび歌としても有名である。音楽授業では輪唱で歌われることが多い。

その他の歌も、メロディーは誰もがよく耳にしているので、英語でも聴きやすい教材といえる。

5. 総評

今後とも、小学校英語教育に関する研究開発校や実践校が増えるにつれて、英語の「歌」教材の開発もますます盛んになり、それらの中から次第に、目的や手段に応じたより有効な教材が精選され定着していくであろう。

今回の研究では、使用場面・目的別では、①名詞・数詞など身の回りの事柄に結びつけて、音声に慣れさせたり意味を理解させるための歌が、全体の約3分の1、②聴いたり、合わせて歌ったりすることを通して、英語の音声やリズムに親しませるための歌が、全体の約3分の1、③そのほか、挨拶の歌や、動作やゲームとともに雰囲気を楽しみながら英語に親しませるための歌が、全体の約3分の1であった。

学年別では、①は中学年に、②は中・高学年に、③は低学年において比較的多く取り上げられている傾向が見られた。

また、今回調査した上位51曲中の約3分の1の教材は、すでに音楽教科書などで取り上げられているなど、メロディーが親しみやすい、あるいはすでに親しんでいるということが、導入段階では教材選択の大きな条件であることが観察された。

英語の「歌」教材は、小学校英語教育において、子どもたちを音声面から英語に親しませ、英語学習の楽しさに近づけるという目的に大いに貢献できると考えられる。

VIII 現行音楽教科書中の歌の英語教材化

1. 音楽教科書の教材活用

英語歌詞が小学生に理解できる程度のもののみを選んでみる。現在、小学校用の音楽教科書を出版している会社は3社ある。

- A 東京書籍
- B 教育芸術社
- C 教育出版

なお、以下の曲名はVIIの4.ですすでに扱ったもので、日本語曲名を優先して記載したものである。

曲名 (会社名・学年)	対応する英語教材タイトル
【低学年】	
きらきらぼし (A1, B1, C1)	Twinkle, Twinkle, Little Star
かっこう (A2, B2, 4, C2)	Springtime
ジングルベル (C2)	Jingle Bells
【中学年】	
ゆかいなまきば (A3, B3, C3)	Old Macdonald Had A Farm
ドレミの歌 (B3, C3)	Do-Re-Mi
せいじゃの行進 (B4, C3, C6)	When The Saints Go Marchin' In
パフ (A4, B3)	Puff
エーデルワイス (A4, B6, C4)	Edelweiss
メリーさんのひつじ (B4)	Mary Had A Little Lamb
オーラリー (A6, B4)	Aura Lee
【高学年】	
かねが鳴る (A5)	Are You Sleeping?
こげよマイケル (A6, C5)	Michael, Row The Boat Ashore
オブラディオブラダ (A6)	Ob-Ra-Di, Ob-Ra-Da
わたしのボニー (B6)	My Bonnie
ドナドナ (C6)	Donna Donna
野に咲く花のように (C6)	Where Have All The Flowers Gone

2. 市販教材の活用

英語の歌のなかで、メロディーが覚えやすく、かつ、英語歌詞が理解しやすい歌を、市販教材から選んでみた。()内は日本語タイトルである。

出典は、

- A Let's Sing Together 1996 アプリコット(カセットテープ付き)
- B Let's Chant Let's Sing Vol.1~4 1996 Oxford University Press
- C Our English Songs Vol.1~2 1971 ELLC

英語曲名（日本語曲名）	出典（頁）
【低学年向き】	
(1) Hello!	A2
(2) The Alphabet Song	B1-4
(3) Twinkle, Twinkle, Little Star (きらきら星) Five Little Monkeys (きらきら星)	A-8, C1-12 A-25
(4) Where's Mr. Thumb (かねが鳴る) Are You Sleeping (かねが鳴る)	A-10 C1-32
(5) Good-by To You (ハッピーバースデー) Good Morning To You (Happy Birthday)	A-32 C1-4
(6) The Purple Sneaker Song (十人のインディアン)	B1-18
【中学年向き】	
(1) Row, Row, Row Your Boat	A-24
(2) Do You Have A Pencil Case? (ロンドン橋)	B1-30
(3) Twelve Months (ロンドン橋)	A-23
(4) The More We Get Together (かわいいオーガスティン)	A-18
(5) We Wish You A Merry Christmas (おめでとうクリスマス)	A-31
(6) Hello! Hello!	C1-2
(7) Springtime (かっこう)	C1-10
(8) Old Macdonald Had A Farm (ゆかいなまきば)	C1-18
(9) Bingo	C1-22
(10) Sing, Sing Together	C1-37
【高学年向き】	
(1) Mary Had A Little Lamb (メリーさんのひつじ)	A-20, C1-5
(2) Jingle Bells (ジングルベル)	A-30
(3) The Donkey (静かな湖畔)	A-26
(4) I Have Paper But I Don't Have Glue (わらのなかの七面鳥)	B3-11
(5) How Do You Do? (しあわせなら手をたたこう)	C1-3
(6) The Farmer In The Dell (たんぼのなかの一軒家)	C1-32
(7) Puff (パフ)	C1-49
(8) Grandfather's Clock (大きな古時計)	C1-73

IX 教材開発の視点

1. 教材開発の核となるコンセプト

国際理解のコンセプトについては、性別・年齢・職業・学歴・海外生活経験などで理解する方法や、理解する内容に相違があるであろうが、小学生に限って言えば、国際理解・異文化理解といっても、理論的・形而上的なものではなく、主として感覚的機能によるものであり、視覚・聴覚に依存して得られるものであろう。

勿論、五年生、六年生になると論理的思考回路も少しずつ形成されてくる者もいるので、教材の開発もそれに対応する水準に少しでも近づける必要がある。

教材については、すでに、多数の出版社、国際理解教育実践校や教材関係業者によって作成され、現場で使われているが、教材作成の核となるべきコンセプトとして、次のようなものを重視したい。

(イ) 各学年の授業と直接関係のある教材

例えば、群馬県高山小学校の低学年では基数の読み方を遊びにとり入れたり、また岐阜県生津小学校では加減の計算を英語でやったりしていたが、ごく自然に英語が身につく将来においても使用される確率が高いものが望ましい。

岩手大学附属小学校で使用中の1年から6年までの教科書を調査した結果、カタカナ英語は実に2000語近くにも及んでいる。これらを十分に活用して、対話にとり入れたり、音素レベルで正しい発音を楽しんだり、その歴史を話したりすることは、異文化理解に十分な役割を果たすことになる。

(ロ) 音楽を核とした教材

小学校の教科書に記載されている外国起源、特に英米両国起源のメロディは数多くある。また、時には、教科書に記載されていなくても児童の興味・関心をよぶ歌を学校で歌うこともあるだろうし、また、教師が生徒に教えてみたい歌もある筈である。

2. 英語の発音に注目

生徒の中には、歌のリズム・メロディ・ハーモニーに魅せられると、意味の分からない英語の歌詞もかなり正確に、かつ上手に歌えるようになる者が多い。日本語では余り使われない音素、例えば /f/、/v/、/θ/、/ð/ や日本語とは微妙に違う他の音素を含む英語の音素体系に次第になじみ、自然な言語音を抵抗なく発音できるようになる。

この傾向は、研究開発校の実践においても明らかであるように低学年に顕著である。

言語には各々の音素体系があり、各々の言語環境の中で生活すれば、子供は音素・言語音に慣れ、それらの言語音を出来るだけ完全に発音しようとするものである。すなわち子供が、言語を覚え始める頃は、どの音素体系も、どの言語音も発音することができることは、帰国子女の例をみても理解できる。自分のおかれた言語環境において、子供は自力で、しかし、往々にして周囲の人たちの助言・指導・命令等に従って自分の「思い」が相手に伝わるように発音するようになる。一方、意思の伝達に役立たないと思われる言語音からは次第に疎遠となり、そしてその言語音から離れ、あるいは棄て、そして、言語音は次第に忘却の彼方へと消え去っていくのである。例えば、普通、日本人は「フ」という言語音を発音することはできるが、普通、/f/は身につかない。/f/は日本語とはほとんど関係なく、役立たないから棄ててしまうのである。

しかし、実際話される英語は、連続している音の流れを切断して、設定された音素の母音や子音という単調な連続ではなく、強勢 (stress)、音の高さ (pitch)、接続 (juncture) や発話の流れの中で現れる声の途切れ目である意味のあるまとまり (chunk) が核として存在する。

日本語の音節は一般に「子音+母音」から構成されているのに対して、英語の音節は母音を中心にその前後に子音を伴うのが普通である。日本語では street は、[stri:t] ではなく [sutori:to] と発音する人が多いのである。これは日本語にない子音連結 (consonant cluster) /sp/ (< speak)、/str/ (< strong)、/skr/ (< scratch)、/mbr/ (< umbrella) などが多く、一般に子音は聞こえ度 (sonority) が母音より低いので聞き落とし易く、また日本人にとっては発音しにくいのである。

しかし、言語環境の影響次第で、日本人でも楽に子音連結をこなせるのだが、そのような環境は、小学生時代に楽しみながら自然に身につけるのが効率がよい。さらに、子供は一語一語の英単語を発音する場合、英語を話したり、読んだりする場合には、単語の弱形 (weak form) と強形 (strong form) の問題や種々の音の連結 (liaison)、音の脱落 (elision)、音の同化 (assimilation) など、原語話者に勝るとも劣らず無意識のうちに自然に修得していくものである。

教室での英語のモデルはネイティブスピーカーがよいとしても、英語が話せる日本人のほうが良いことを自覚し、努力を継続することが必要である。

3. 差別語に注目

世界の小学校における外国語教育、特に英語教育の現状から考えると、多少の紆余局折はあるにせよ、日本においても、近い将来、英語は小学校において学習すべき必修教科になるように思われる。

日本国中の小学生が英語を学習するようになると、必然的に大人が陰に陽に種々の形で英語教育に関与してくることが予想される。多くの大人は英語の知識に関しては自分たちが中学生時代、高校生時代、あるいは大学生時代に学んだ内容とさして変わらないのではないだろうか。そして、異文化理解、人権、差別などに関する意識が希薄なのではないだろうか。

英語を指導する立場にあるものは実際的な英語活動ばかりでなく、その背後、あるいは周囲の状況を絶えず研究する必要がある。特に、英語を使用する際には差別語に注目しなければならないので、ここでは差別語について考えてみたい。

「差別」とは、主として心的態度にかかわる「偏見」から生まれるのが普通で、特定の個人のものであり、普通「行動」を伴うものである。「偏見」とは「あまり根拠のない主として非好意的な判断」と解釈することができるが、偏見にも当然度合いの差があり、強い場合には「差別」という実際行動に到達する。例えば、「A国人は怠け者だ」という見方は、全A国人に当てはまるとは考えられず、視野の狭い、硬直的な偏見であるといえるだろう。つまり、全A国人が一つのカテゴリーであり、これに対して「A国人は怠け者である」というカテゴリカルな思考である非好意的な偏見を持つようになり、そしてその偏見が嵩じて実際の行動にできれば差別行為になるのである。

American Indian, Negro, Eskimo, chairman, fireman, mailman, policeman, stewardess など日本人には聞き慣れた表現が差別語と考えられているが、これらの語を使用すること自体が差別行為と解釈されることがあるのである。

言語は社会言語学的に言えば「社会の産物」であり、流動的な側面もあるのでその影響力は計り知れないほど大きなものになりうるのである。差別表現に関しての情報はとりもなおさず社会の情報であり、その情報伝達の意義は大きい。

日本の教育現場においては言語学習を外部の社会と関連させて把握させる傾向はあまり見られない。これからの英語学習においては、多くの事象をグローバルな視点から考察することがますます重要視されなくてはならない。

4. 小学校の教科書に出てくる外来語の活用

外来語、とくに英語は、その正確な発音はともかく、日本人の生活用語として、多くの分野で使用されている。柔軟な日本人の頭脳をもってすれば、適切な日本語訳を考案できることもあるだろうが、不便を感じる人も相当多いであろう。幼児でさえもパパ、ママをはじめとして英語を使う時代なのである。そこで、小学生が教科書で知る外来語が英語学習にどの程度関与できるか考えてみたい。

以下にあげる外来語は、岩手大学教育学部附属小学校の1年生から6年生までが使用していた全教科書に記載されていた外来語のリストの一部である。通読する際には次の諸点に注意していただきたい。

- ① () 中の数字は使用回数を示す。数字が書かれていない場合は1回しか使用されていないことを示す。
- ② { } 中で必要な解説を初出時に行った。
- ③ < の後の略語は外来語が何語であることを示す。Port. はポルトガル語、Sp. はスペイン語、Du. はオランダ語、Fr. はフランス語、Ger. はドイツ語、It. はイタリア語、Eng. は英語など。なお、その後原則としてスペリングを示した。
- ④ 和製語も外来語が構成要素であるものはく和で示した。
- ⑤ 同じ語でも、同一学年の同科目の上・下巻にあるものは各教科書にあるものとして示した。
- ⑥ 発音に関しては多少の相違は無視した。
- ⑦ 紙面の関係上、1年生の全科目、2年生の数科目の教科書と5、6年生の国語の教科書のみを調査対象とした。
- ⑧ 教科書の実名は省略した。

● 1年 国語 上

バス、トラック (2)、タイヤ、ポンプ<Du. pomp ; (Eng. pump)、クレーン (車)

● 1年 国語 下

ライオン (7)、ジャンプ、ジャングルジム、センチ (2) <和 {<Fr. centimètre;<Eng.centimetre の略}、ニュース、チョーク、チャイム、ヘルメット、カーテン、ジュース、シール、ロープウェー、スープ、ハイキング、ソース、カレンダー、マフラー、ベランダ、カップ、ドア、バナナ、ピーマン<Fr. piment、カスターネット、ピアノ、ゲーム

● 1年 算数

ゼロ、ぼうる (ball)、けえき (cake)、かあど (card) (3)、ばなな、ケーキ、ビル (7) <和 {<Eng. building の略}、カード (3)、ポット

● 1年 生活科

オクラ、サルビア、コスモス、マリーゴールド、ペチュニア、ハムスター、ゲーム (2)、ビンゴ (2)、ページ、プレゼント、マーチ、グループ

● 1年 書写

マラソン、ママ (2)

● 1年 音楽

カスターネット、タンブリン、ハーモニカ (3)、バス (6)、マスト、トンネル、ワンツースリー、リズム (3)、アメリカンパトロール {音楽の曲名}、トライアングル、シンホニー、ペンギン、マーチ、ドア、チューリップ

● 1年 工芸

テレビ (5) <和 {<Eng. television の略}、テレビゲーム (5) <和、ピアノ、ロケット、ピ

ーズ (3)、ボタン (2) <Port. botão、ライオン (2)、スポンジ (2)、ドーム (2)、コスモス、ジェットコースター<和 {<Eng. Roller coaster}、タワー、ブランコ<Port. balanço (揺らすもの) ? (<Eng. swing. 日本語の「ぶらぶら」に由来するという説もある)、キャンプファイア、コンクリート

● 2年 生活科

クイズ (2)、セロハン、トマト、キャンプ (3)、テント (4)、ライト、セロリ、サラダ、ベッド、ハンガー、サーフィン、ノート、ゴム<Du. gom {<Eng. gum}、テープ、(2)、クリップ、ビニール (2)、ゼリー、カップ、ビン、発泡スチロール<Ger. styrol、ルール、ミキサー (2)、パック (2)、タオル (3)、フィルム (40)、バット、カード、バス、ゲーム (3)、プログラム、ポスター、ストーブ (2)、コート (2)、ハムスター (2)、タンブリン (2)、サファリ、テーブル、ウォーク、ラリー、シュート

● 2年 書写

ピアノ、オルガン、ハーモニカ (3)

● 2年 音楽

ワルツ、リズム、シャボン (だま) <Port. sabão、クリップ、ページ (6)、ポルカ (3)、シャツ、サンタクロース、クリスマス、マーチ、トンネル、タンブリン

● 2年 工芸

シャツ、発泡スチロール、フライパン<和 {<Eng. Frying pan}、サボテン<Sp. zapote? {<Eng. cactus. <Port. の sabão と「手」の合成語の転という説などもある}、バトミントン (2)、サインペン (6) <和 {<Eng. feltpen (商標)}、クレヨン (2)、ジャンプ、アスレチック、ゴール、テープ、プレゼント (2)、チーズ、ケーキ (4)、キャップ (2)、インク (2)、マラソン、トマト、バナナ、チューリップ、ラッコ<アイヌ語 rakko、カメラ、パーティー、カンガルー、ペンライト、キャンディー、クッキー

● 5年 国語 上

キャンプ (5)、テレビ (5)、テント (8)、フライパン (3)、プール (3)、ランプ (5)、ベッドランプ、ウィスキー、ノート (3)、カード (3)、オーケストラ、コンクール (3)、<Fr. Concours {<Eng. competition ; contest}、クラブ、メモ、スケッチ、クラス (3)、グループ、ページ (4)、キロメートル (3)、メートル、マグマ、センチメートル、スポーツ、ベッド、トラック、スピード、アーチ、バレエ、アンケート<Fr. Enquête {<Eng. questionnaire}、ロケット、キャプテン (3)、ライバル、シリーズ、ポンプ、バット、ワープロ、<和 {<Eng. Word processor の略}、エネルギー<Ger. energie {<Eng. energy}、アパート<和 {<Eng. apartmenthouse の略}、プランクトン (2)、ミネラル、ゲーム

● 5年 国語 下

ページ (6)、グループ、クラス (9)、アンケート (4)、テーマ<Ger. Thema {<Eng. theme}、グラフ (2)、クレヨン (2)、シリーズ、ケーキ (6)、アウト、ニュース、コンクール、ビニール、オレンジ、アイディア (3)、ランドセル {<Du. ransel の靴}、バランス、ジュース (3)、ノート、リレー (2)、バトン (2)、マフラー (3)、ミルク、ゲーム

● 6年 国語 上

ピンク、リズム、クラス (20)、ユーモア、タイプ、ノート、ゴム、ハンバーグ、エプロン、ページ (4)、イメージ、アニメーション、スーパー<和 {<Eng. supermarket の略}、バラエティー (7)、パック、ゲーム (7)、テープ (7)、ニュースビデオ、スポーツ (3)、パンフレット、クイズ、インタビュー、スタジオ、アンケート、リモコン<和 {<Eng. Remote control の略}、アルバム、スピーチ、グループ (4)、メートル、スケート、キログラム (2)、センチメートル (3)、ジャンプ (4)、ペンギン (3)、スピード、キロメートル、ズボン<Fr. jupon、エネルギー、ジェット機、ジャングル、クレヨン、イエス、ノー、パトロール、ラジオ、パン<Port. pão、コ

マーシャル、バケツ (2)、サッカー、ランドセル、チーム、スニーカー、ボール、バス (2)、ゴムボート、シュート、ブリキ<Du. blik、ゴール、ヨット、キーパー、ゴールキーパー、タンカー、ユーモラス、ビニール、スキー、キャラクター、メディア (8)、スイッチ、チャンス、ホテル (2)

● 6年 国語 下

コンパス、ラムネ {<Eng. lemonade の転訛}、スキー (3)、ページ (5)、クラス (10)、イラスト (2) {<Eng. illustration の略}、インタビュー、ベストテン、テレビ、スポーツ、アンケート、スタート、クラブ、プール、メートル (8)、リレー、パイロット、ドーナツ、ピアノ (3)、センチメートル (3)、ブルトーザ、ダム、ロープ (3)、センチ、キロ (2) {<Eng. kilogram, kilometre の略}、ノート (2)、グループ (5)、シルバーシート<和、オレンジ (2)、シャボン玉 (8)、カード (12)、カルタ (11) <Port. carta、カルテ (9) <Ger. karte、キリスト<Port. Cristo、パン (2)、カステラ (2) {Port. bôlo de Castella 「(スペインの) カステラ (古王国) のケーキ」に由来する説が有力}、ボタン (2)、タバコ<Port. tabaco、キリシタン<Port. cristão、トランプ、 frasco<Port. frasco、ランドセル、コンパス (2)、スポイト<Du. Spuit {江戸時代「水銃」と呼ばれた消防ポンプを意味した}、レンズ (2) <Du. ; Eng. lens、ガラス (2) <Du. glas、ポンプ、ゴム、ブリキ、コーヒー (2) <Du. koffie ; <Eng. coffee、ガーゼ、<Ger. gaze、ワクチン<Ger. vakzin、チフス<Ger. typhus、ワッペン<Ger. wappen、ピッケル<Ger. pickel、アトリエ<Fr. atelier、デッサン<Fr. dessin、パレット<Fr. palette、レストラン<Fr. restaurant、オムレツ<Fr. Omelette {<Eng. omelet ; omelette}、ソプラノ<It. soprano、テノール<Ger. tenor ; <It. tenòr ; <Eng. tenor、アルト<It. Alto {<Ger. alt ; <Eng. alto}、ソナタ<It. sonata ; <Eng. sonata、バレリーナ<It. Ballerina {<Eng. ballerina}、オペラ、テンポ、ラジオ、テレビジョン、ニュース、トラック、ナイフ、スポーツ (2)、ボール、オルゴール {<Du. orgel の転訛。現代オランダ語では、「オルガン」を意味する}、コレラ<Du. cholera、アンコール、クリスマスカード、ライス、カップ、コップ<Du. kop・{<Eng. glass}、グラス、ガム、ゴム、チェーン、パーティー、ファイル、フェンス、シナリオ、ナレータ、ビデオ (3)、スライド (7)、ナレーション (4)、ホテル、コンクール、トースト、マラソン、メロディー (2)、ミニスカート、プラネタリウム、カレーライス {<Eng. curry and rice ; curried rice ; curry with rice}、ガソリン、トラック、タイヤ

上記の外来語、外来語の転訛などは、教科書に出てくるものの3分の1弱にすぎない。しかし、顔を見せない残りの3分の2強の外来語も、アナウンス、サービスなどのように、私たちが日常生活の中で耳にしたり、使ったりしている言葉が圧倒的に多いのである。

また、小学生たちが、スポーツ、趣味、交遊、通学、授業、家庭生活などでなにげなく使用している外来語も多いはずであるが、これらの外来語については、生徒も教師も積極的な関心を示すことがあまりないのが普通である。たしかに生徒が、オランダ語、ドイツ語、ポルトガル語などとはつゆ知らず、みんな英語だと思って外来語を元気よく使っているのを見ることは楽しいことではあるが、外来語が英語学習の核の一部となるようにする必要がある。

5. 外来語ダイナミズム覚醒のために

言語習得については、しばしば「臨界期 (critical period)」の存在について言及され、とくに音声に関しては7歳ぐらいがその時期に当たると言われている。また、「言語成熟期 (language puberty)」という時期があり、この12歳から14歳くらいまでの時期に子どもは頭脳に論理的思考回路を発達さ

せると言う人もいる。私自身の経験や観察によれば、このような説はかなり多くの子どもたちに当てはまるように思われる。しかし、この時期をかなり過ぎても努力次第で見事に言語を習得していく人も少なくない。このような人たちは言語的逆境を克服したと言えるのである。

これに反して、子どもは恵まれた言語環境に囲まれている場合が多い。とくに、学校は教師や友人も多く、言語環境は良いと言えるであろう。そして、「思い立つ日が吉日 (There is no time like the present.)」なのである。ところで、私は言語習得のためには「7つの‘き’」が必要だと思っている。その1つに「好機」があるが、子どもたちにとって今こそ好機来たるなのである。

英語ではない外来語に対応する英語に「好奇」の目を向けさせ、発音や意味、できたら背景的知識を教えたり、ときには「やる気」を起こさせ「根気」よく調べさせたりもするのである。このようなことが「動機」となって「年期」をかけて勉強する。とくに大切なことは「暗記」するくらいよく研究するようになることである。この「7つの‘き’」に気付かせるのが教師の義務でも、責任でもあり、同時に自らの勉強にも、喜びにもなるのである。

外来語の多くは具象名詞だが、動詞や形容詞などを多少補ってやると、生徒は誤りをあまり気にすることなく言語活動を行うようになることが多くなるようである。発音については、文節音素はもちろんだが、超文節音素に早期からなじませたい。

外来語が持つダイナミズムを教師が生徒に気付かせることができるならば、生徒はそれをきっかけとして日本と外国とを広い視野を持って観察し、学窓を離れても研究できるようになるであろう。要は教師の賢察と生徒に前向きに物事に取り組む積極的な精神を持たせるための的を射た指導が求められているのである。

おわりに

今回の私たちの研究は、21世紀の社会の変貌に伴う小学校英語教育と、その方向性を展望し、具体策を提案しようとした。そのために、北は青森、南は鹿児島まで足を伸ばし、多くの研究開発指定校を訪問し、活動振りを見学し、同時に撮影もしてきた。また、研究開発校の報告も送付していただき分析もした。また、3500人弱からアンケートの回答をいただきご好意に心から感謝している。

しかし、研究者が昨年各大学に分かれることになり、研究の大成を期したために、かえって中途半端なところで終わってしまったことを残念に思っている。今後、残った資料の分析をし、撮影した多くのビデオを編集し発表することを考えている。

参考文献

Ellis, R. (1985) *Theories of Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford Univ. Press.

Krashen, S. D. (1974) "The Critical Period for Language Acquisition and Its Bases."

Annals of the New York Academy of Sciences.

Lenneberg, E. (1967) *The Biological Foundations of Language*, New York: John Wiley.

Penfield, W. & Roberts, L. (1959) *Speech and Brain Mechanisms*.

阿部恵子、Mary Marquardt, 1994 "Let's Sing Together" アプリコット.

英語教育協議会/中島文雄 1969 "Our English Songs" ELEC.

長瀬壮一、1997 「子どもと先生が楽しむ英語ソング」明治図書.

音楽教科書は、東京書籍、教育芸術社、教育出版の3社の、いずれも平成7年2月文部省検定済みのもの。